

# 江湖詩派のネットワークに関する研究 ー劉克莊を中心としてー

文 学 研 究 科

哲 学 歴 史 学 専 攻      東 洋 史 学 専 修

2 0 2 4   年   度

B B A 2 3 0 2 6

リ ュ ウ      エ イ ニ ヨ

劉                  泳   如

# 目次

|                               |    |
|-------------------------------|----|
| 1. 序論 .....                   | 1  |
| (1) 研究目的 .....                | 1  |
| (2) 「江湖詩派」とは？ .....           | 2  |
| 2. 先行研究の整理 .....              | 4  |
| (1) 江湖詩派の先行研究 .....           | 4  |
| (2) 劉克莊に関する先行研究 .....         | 9  |
| 3. 劉克莊を中心とする江湖詩派のネットワーク ..... | 10 |
| (1) 官途につく前の交遊関係 .....         | 11 |
| a 血縁関係を持つ江湖派詩人 .....          | 11 |
| b 撫州臨川の宋氏 .....               | 15 |
| c 江湖詩派の前期詩人たち .....           | 16 |
| d 詩社の社友グループ .....             | 20 |
| e 宗室詩人たち .....                | 31 |
| (2) 地方官時代の交遊関係 .....          | 33 |
| a 幕友関係の詩人 .....               | 33 |
| b 遊走型の詩人 .....                | 34 |
| c 臨安で交遊した福建詩人 .....           | 35 |
| d 臨安書坊と南岳稿の影響 .....           | 36 |
| (3) 晩年期に福清林氏との交遊関係 .....      | 40 |
| (4) 考察しにくい交遊関係 .....          | 43 |
| a 「故人」の関係 .....               | 44 |
| b 後輩への指導 .....                | 44 |
| c 判断しにくい関係 .....              | 45 |
| 4. 結語 .....                   | 46 |
| 参考文献 .....                    | 49 |

## 1. 序論

### (1) 研究目的

「唐宋変革論」という用語があるように、宋代（960—1279）は大きな歴史の転換点であった。南宋（1127—1279）の社会変化は特に顕著だった。靖康の乱の後、北方の人々が臨安を中心に南下した結果、両浙路の人口は激増した。人口数の増加と土地面積の減少が、より深刻な土地の兼併を招き、社会構造の激変を引き起こした。同時に、都市の勃興、奢侈文化の流行、インフレーションが士人階層（エリート階層）を含む人々の生活習慣に変化をもたらした。また、科举制度の整備によって、士人階層の人数は爆発的に増加した。故に、士人達にとって科举に合格し官僚となることは益々困難となった。金文京（2022）<sup>1</sup>は、中には科举を目標としない士人も存在したことを指摘している。そして、前近代中国における士農工商という階層間の距離が、宋代には明確に縮小し、官民の間に多くの中間層が出現したことを指摘した。宋代の士人集団の「沈下」や、市民層との融合による新しい士人層の台頭がうかがえることも指摘している。筆者が注目している「江湖詩派」も、この新しい士人層の一部と言える。しかし、これまでの学界では、上層士人層（科举に合格し、官僚となった士人）の研究を重視してきたが、下層士人層（科举に合格をできなかった、あるいは科举の合格を目標としていなかった、及び地方レベルの官僚にとどまった士人たち）の研究には多くの空白がまだ残っている。宋代の士人階層の全体像に対する正しい認識のために、この空白を埋める必要がある。

陳書良（2004）<sup>2</sup>によると、江湖詩派は特定の社会背景の中で生まれた非常に特殊なグループであり、その存在は時代の個性を体現し、その影響力は南宋中後期の詩壇を覆う程の勢いであった。そして、彼らの影響は元代（1279—1368）のみならず、清代（1644—1912）<sup>3</sup>まで残っていた。宋代以前にこのような詩人グループが存在しなかったわけではないが、大量に出現して社会現象となり、詩壇を左右するような詩人グループは稀である。江湖詩派は江西詩派に次いで南宋の詩壇を占めた詩人グループであり、文学史の面で南宋の詩壇を研究する上でも避けて通れないグループでもある。そして、江湖詩派の研究は南宋中后期の社会状況、及び宋代の士人階層の分化とその全体像を整理するために重要である。

江湖詩派の研究は、他の研究に比べて遅れて始まった。現在のところ多くの成果を上げているが、多くのテーマにおいて、未解明の部分を残している。そこで、筆者はよりミクロの視点で、江湖詩派のリーダーである劉克莊を中心とする江湖派詩人のネットワークを

---

<sup>1</sup> 金文京「士大夫文化と庶民文化、その日本への伝播」（荒川正晴等編『東アジアの展開：八～一四世紀』岩波書店、2022年）を参照。

<sup>2</sup> 陳書良『南宋江湖詩派与儒商思潮』（甘肅文化出版社、2004年）を参照。

<sup>3</sup> 鹿苗苗「清代中期「江湖詩人群体」考論」（『東南學術』2016年第5期）を参照。

より詳しく研究してみたい。劉克莊は官僚としてすさんだ生活を送り、朝官になったのは晩年になってからだった。また、彼は江湖詩派の詩人で、最も多くの史料が残っている。彼が江湖詩派のリーダーであったかどうかはさておき、彼が南宋中後期の詩壇に与えた影響は否定できない。彼の影響は出身地の福建路から広がっていったが、それは福建路だけにとどまらなかった。劉克莊の宦遊経歴（官僚を就任するための移動）が彼の交際範囲を大きくしたからである。また、劉克莊の交遊関係の中には、宰相のような高官もいれば、低い地位の士人もいた。筆者のこれまでの調査では、劉克莊は江湖詩派の主要地域の多くの詩人と交遊があった。したがって、彼の交遊関係を調べることは非常に有意義である。管見の限り劉克莊の交遊関係を検討する先行研究は少なくないが、劉克莊を中心とする江湖詩派のネットワークに焦点を当てた研究はない。本稿は、江湖詩派における劉克莊を中心とするネットワークの交遊関係を探り、江湖詩派と宋代の士人階層の交遊研究に示唆を与えるべく、江湖詩派における劉克莊の位置づけを再確認する。

## （２）「江湖詩派」とは？

「江湖」とは地理的な用語である。しかし、「江湖詩派」の「江湖」には、政治中心から遠く離れているという意味もある。また、「江湖詩派」は後世に構築された概念である。侯体健（2017）<sup>4</sup>は南宋から現代にかけて構築されてきた「江湖詩派」の概念を詳細に整理した。

宋、元、明代の学者と、江湖詩派のメンバーである劉克莊も「江湖派」という概念を認識しておらず、それを一種の詩風と見なしていた。一方、「江湖詩派」という言葉は、清朝初期の曹溶が『詩家鼎裔』で提起したものに遡ることができる。ただし、広く使われているのは、清代の乾隆時代（1736—1796）に『四庫全書』を編纂した館臣たちによる認識である。彼らの「江湖詩派」に対する認識は主に２種類に分けられる。詩人について語る場合、「江湖詩派」は民間人や下層士人の身分を代表する人々を指す言葉となる。一方で詩の内容について語る場合、「江湖詩派」は詩風を代表する言葉である。

20 世紀の近代学術が始まって以来、学界は「江湖詩派」、ひいては南宋の詩壇の存在を無視してきた。当時、学界は「江湖詩派」が詩派であることを認めていなかったことを示していた。しかし、1930 年に刊行された『宋詩研究』<sup>5</sup>は初めて「江湖詩派」の名を『江湖集』のテキストと関連づけた。これにより、「江湖詩派」は単なる詩風を指す言葉から、本格的に詩派を指す言葉に変化した。しかし、江湖詩派に対する評価は依然として高くない。

20 世紀後半期以降、江湖詩派が詩派であったかどうかについては、3 つの見解が生ま

---

<sup>4</sup> 侯体健「「江湖詩派」概念的梳理与南宋中後期詩壇図景」（『文学遺産』2017 年第 3 期）を参照。

<sup>5</sup> 胡雲翼『宋詩研究』（商務印書館、1930 年）を参照。

れた。張宏生は詩派としての江湖詩派に賛同する研究者である。1995 年に出版された彼の著作は江湖詩派を定義しており、それ以来この定義は権威あるものとみなされている。反対派には、劉毅強 (1993)、史偉、宋文濤 (2008)、王水照、熊海英 (2009)、侯体健 (2011)<sup>6</sup>などがある。上記の研究者が発表した 4 つの論文はいずれも江湖詩派が詩派ではないと主張している。理由としては、江湖詩派には集中的で安定したネットワークが少ないこと、また、統一的な詩学の主張がないことを挙げている。また、江湖詩人のグループには名実ともにリーダーは現れなかったと考えている。総じて言えば、江湖詩派は一般的な理論上の文学流派の基準に合わないと考えられている。しかし、侯体健 (2017・2019)<sup>7</sup>はその後、「江湖詩派」という言葉の存在意義を改めて肯定し、支持と反対の論調を調和させた。また、動的な視点から「江湖詩派」のメンバーを位置づけなければならないという非常に洞察力に富んだ主張をしている。「江湖詩派」の定義について、本稿では侯体健 (2017・2019) の主張を総合し、「江湖詩派」を動的な視点で定義する。江湖詩派のメンバー数については張宏生 (1995) の見方を採用している。

以上の整理と先行研究の成果を含めて、「江湖詩派」を次のように定義する。

江湖詩派は南宋中後期に活動していて、一定の影響を持つ緩やかな詩派である。彼らの主要メンバーとして現在確定できるのは約 140 人<sup>8</sup>で、その大部分は民間人や下層の地方官僚で、構成が複雑である。その多くは任官のために宦遊経歴があったり、純粋な遊走型詩人として「江湖」を漫遊する。高級官僚や富裕層に行謁するのが彼らの生き方の一つだが<sup>9</sup>、それ以外にも友人や家族が互いに生活を助け合う場合もある。あるいは詩などの他の文学作品を売ったり、講学を行ったり、書籍を売ったりして収入を得ていた。官界への昇進には縁がなかったが、彼らは国家の政治を心配しつつも、政治の中心からは離れている階層であった。一部の詩人たちは「江湖詩禍」の経験者であり、多くの詩人は長年にわたって詩禍の影響を受けていた。彼らの創作には主に唐代晩期のスタイルを追求し、姚合、賈島を学習対象とし、五律、七絶詩の創作に精通していたまた、永嘉四霊の詩風を

---

<sup>6</sup> 劉毅強「南宋「江湖詩派」名弁一簡論江湖詩派不足成派」(『華東師範大学学報』1993 年第 3 期)、史偉、宋文濤『「江湖」非「詩派」考論』(『社会科学者』2008 年、第 8 期)、王水照、熊海英『南宋文学史』(人民出版社、2009 年)、侯体健「劉克莊的鄉紳身分与其文学総体風貌的形成——兼及「江湖詩派」的再認識」(『中山大學学報』2011 年第 3 期)などを参照。

<sup>7</sup> 侯体健「「江湖詩派」概念的整理和南宋中後期詩壇図景」(『文学遺産』2017 年第 3 期)及び『士人身分与南宋詩文研究』(復旦大学出版社、2019 年)を参照。

<sup>8</sup> 江湖詩派の具体的な人数について、現在最も権威があるのは張宏生「江湖詩派成員考」(『古典文献研究』1990 年第 2 輯)に定めた 138 人である。しかし、筆者の査読では、張宏生は徐從善を見逃しており、筆者は孫培 (2023) の意見を参考にして孫惟信を江湖詩派メンバーに加えるべきであり、メンバーは少なくとも 140 人になるはずだと考えている。

<sup>9</sup> 行謁とは、詩を用いて高級官僚など富裕層に資金援助を要請する行為で、その中で道具となる詩は謁客詩とも呼ばれる。

受け継ぎ<sup>10</sup>、表立っては江西詩派の反対者であった。メンバー構成が複雑なため、詩のスタイルを統一することは難しいが、いずれも「江湖の味」を持っている。詩風は清らかかつ繊細で、用語は簡単明瞭である。南宋最後の文学者である陸遊が亡くなった後、陳起が『江湖集』を編集したことをきっかけに集結し、南宋の詩壇において一つの席を得た。その代表的な人物は陳起、劉克莊、戴復古、劉過、姜夔などである。

## 2. 先行研究の整理

### (1) 江湖詩派の先行研究

江湖詩派の先行研究ではほぼ一定期間ごとに学術史整理<sup>11</sup>が行われ、1989年から2023年までの江湖詩派の学術史をほぼ網羅することはできるが、その整理の多くは簡略な、あるいは断片的な学術史整理である。

伝統的な観念<sup>12</sup>による制約のため、江湖詩派の研究のスタートは遅かった。1980年代は江湖詩派が再び注目、「名誉回復」された時期だった。特に費君清(1983)<sup>13</sup>と尚清(1987)<sup>14</sup>の2人の功績が大きい。1990年になると、本格的に研究のピークに入った。初期の江湖詩派に関する思想研究と芸術鑑賞の文章が多かった。日本の学界における江湖詩派に関する研究は、内山精也を中心に江湖詩派に集中した学術討論会を2011年から2014年にかけて数回開催した。そのメンバーには日中両国の多くの研究者が含まれている。この研究成果<sup>15</sup>は2015年に出版されたが、その間の研究は文学方面に集中することが多かった。一部の論文は中国大陸でも出版されている。一方、中国台湾地区では江湖詩派に対して早くから注目が集まり、多くの論文の成果<sup>16</sup>があった。日本の状況も似ており、文学面の検

---

<sup>10</sup> 永嘉四靈は徐照、徐生、翁卷、趙師秀の四人の詩人で、彼らはすべて温州の人で、温州は古く永嘉と呼ばれていた。そして、彼らの字と号には「靈」という字があるので、「永嘉四靈」と呼ばれる。

<sup>11</sup> 馮乾「近二十年來南宋江湖詩派研究綜述」(『文史知識』1998年第1期)、葉幫義、胡傳志「20世紀80年代以來的江湖詩派研究」(『陰山學刊』2004年第1期)、趙海霞『南宋江湖詩派研究』(內蒙古師範大學修士學位論文、2006年)、陽國梁「近十年來江湖詩派研究綜述」(『塩城師範學院學報(人文社會科學版)』2013年第5期)、孫培『南宋江湖詩派的群体性与地域性考察』(四川大學出版社、2023年)などを参照。

<sup>12</sup> 宋代から現代に至るまで、学界は「江湖詩派」の存在を意識してきたが、批判的な態度で語られてきた。20世紀後半の文学史研究者でも江湖詩派に対しては高い評価をあたえていない。例えば、劉大傑『中国文学發展史』(上海人民出版社、1973年)では、江湖詩派を「人柄も成績も良くない」者達であると評している。

<sup>13</sup> 費君清「対南宋江湖詩人应当重新評價」(『文学評論』1987年第3期)を参照。

<sup>14</sup> 尚清『江湖派新探』(『語文導報』1987年第5期)を参照。

<sup>15</sup> 内山精也 編『南宋江湖の詩人たち—中国近世文学の夜明け』(勉誠出版、2015年)を参照。

<sup>16</sup> 鄭垂薇『南宋江湖詩派之研究』(國立政治大學博士學位論文 1982年)、康莉娟『非確定性文学集团在文学史研究上的意義—以江湖詩派為例』(淡江大學修士學位論文 1998年)、陳杏玫『南宋四靈詩派与江湖詩派之研究』(國立台南大學修士學位論文 2002年)を参照。以上の3つの學位論文以外、江湖詩派

討に集中している。

1995 年までの先行研究は、江湖詩派の基礎概念の構築に集中していた。胡念貽(1982)<sup>17</sup>が『江湖集』の編纂と流布に対して疑問を提出して以来、学界は『四庫全書』に収録されている『江湖小集』と『江湖後集』と陳起の『江湖集』に大きな違いがあることを発見した。その後、長期間にわたり『江湖集』のテキストに対しての検討が展開された。特に多くの研究成果を挙げたのが費君清<sup>18</sup>である。このほか、張瑞君(1990)<sup>19</sup>と王媛(2016)<sup>20</sup>の研究成果も価値がある。また、鄭亜薇(1982)の文章では台湾地域に現存する江湖諸集を整理した。卞東波<sup>21</sup>は現在、日本に残存している『江湖集』のテキストにも言及した。

その後、『江湖集』の訂正により、これまで梁昆(1983)<sup>22</sup>が提出した『江湖集』に収録され詩人で江湖詩派のメンバーを定義するという見方は否定される。胡明(1987)<sup>23</sup>と李越深(1988・1995)<sup>24</sup>は詩が「江湖味」を有しているか否かで詩人が江湖詩派のメンバーであるかを判断すると主張した。その後、張瑞君(1990)<sup>25</sup>、胡益民(1990)<sup>26</sup>、劉毅強(1991)<sup>27</sup>、張繼定(1994)<sup>28</sup>はいずれも自分の意見を発表し、江湖詩派は以前梁昆(1983)

---

に対する全体的な研究のほか、方岳、戴復古、劉克莊などの江湖派詩人の文学作品を注目する研究もある。

<sup>17</sup> 胡念貽「南宋〈江湖前、後、続編〉的編纂和流伝」(『文史』1982年第16輯)を参照。

<sup>18</sup> 費君清「『永樂大典』中発見の江湖集資料論析」(『杭州大学学报』1988年第1期)、費君清「『永樂大典』中南宋詩人姓名考異九則」(『文献』1988年第4輯)、費君清「四庫本『江湖小集』与旧本江湖集的關係」(『寧波大学学报(人文科学版)』1989年第1期)、費君清「論『江湖小集』非陳刻『江湖集』」(『文学遺産』1989年第4期)、費君清「澄清有関『江湖集』的幾個問題」(『浙江学刊』1989年第6期)、費君清「宋人江湖詩統補」(『電大教育』1997年第5期)、費君清「『南宋群賢小集』匯集流伝經過揭秘」(『紹興文理学院学报(哲学社会科学版)』1999年第4期)などを参照。

<sup>19</sup> 張瑞君「『江湖集』、『江湖前後続集』の刊行及江湖派的鑑定」(『文献』1990年第1期)を参照。

<sup>20</sup> 王媛「江湖詩集考」(『文史』2016年第3期)を参照。

<sup>21</sup> 卞東波「域外漢籍中所見南宋江湖詩人新資料及其価値」(『古典文献研究』2013年第0期(同年は1期のみ))、それ以外、内山精也 編『南宋江湖の詩人たち—中国近世文学の夜明け』(勉誠出版、2015年)にも収録された。

<sup>22</sup> 梁昆『宋詩派別論』(商務印書館、1938年)を参照。

<sup>23</sup> 胡明「江湖詩派汎論」(『文学遺産』1987年第4期)を参照。

<sup>24</sup> 李越深「江湖派詩歌風格論」(『温州師院学报』1988年第2期)、李越深「江湖詩人と江湖詩味について」(『浙江社会科学』1995年第4期)などを参照。

<sup>25</sup> 張瑞君「『江湖集』、『江湖前後続編』の刊行及江湖派的鑑定」(『文献』1990年第1期)によれば、各種の『江湖集』に収録作品があるかないか、酬唱関係を鑑別基準として、四庫全書本の『江湖小集』、『江湖後集』にいる洪邁を除いて、永嘉四靈らを加え、119人のメンバーを特定した。

<sup>26</sup> 胡益民「關於江湖派的鑑別基準与「江湖詩人名单」」(『江淮論壇』1990年第5期)により、「江湖諸集」に基づいて、メンバーリストには35人も加わることができると考えている。

<sup>27</sup> 劉毅強「『江湖集』叢刊所収詩人補考」(『華東師範大学学报』1991年第3号)によれば、『永樂大典』の中で「江湖」と命名された詩集は非常に多く、その中で四庫全書本の『江湖小集』、『江湖後集』に収録されていない詩人は少なくとも38人いる。故に、『江湖集』叢書に収録された人数は149人以上にのぼることを指摘した。

<sup>28</sup> 張繼定「論南宋江湖派的形成和界定」(『浙江師範大学学报(社会科学版)』1994年第1期)では、5

が考えていた 109 人よりも多く、130 人から 140 人の間に定義されていると考えられている。張宏生（1995）は社会的地位、活動時間、江湖諸集の収録状況、陳起との交遊状況、伝統的な見方などの 5 つの基準を制定し、138 人の詩人を江湖詩派のメンバーとして確定した。これは江湖詩派のメンバー数の権威的な見方にもなった。しかし、その中にはまだ一部批判的な見方がある。例えば、張宏生は永嘉四霊を江湖詩派の中に入れた。これは永嘉四霊と江湖詩派の関係に対する彼の認識に由来する。しかし、一部の学者は永嘉四霊が江湖詩派の一部と見なすべきではないと考える<sup>29</sup>。一方で、張宏生（1995）を含む研究では、一人一人の江湖詩人と永嘉四霊との関係は極めて密接で、文学と思想上の交流は頻繁に行なわれていたと考えている。そして両者が活動する時間には重なりがある。文学史の範疇では、永嘉四霊も江湖詩派と同じように独立した詩派を形成していない。また、江湖詩派のメンバー構成は複雑で、詩風にもそれぞれ特色があり、詩風だけで両者が同じグループに属していないと考えるのは早計といえる。永嘉四霊が江湖詩派の一部かどうかは学術界の議論の重点の一つである。

その中で江湖詩派にとって重要なことのひとつが「江湖詩禍」<sup>30</sup>であり、研究者たちの注目のポイントでもある。張宏生（1992）<sup>31</sup>は江湖詩禍が発生した時間、原因、関係者と影響の 4 つの方面に対して斬新な角度で解釈を行った。史弥遠に批判された詩文は、実は江湖詩禍が起こる前に書いたものだと考えている。詩禍は史弥遠が江湖派詩人に報復した理由にすぎないが、江湖詩人は史弥遠の行為に不満を持ち、常に自分の意見を発表している。これこそ江湖詩禍が発生した根本的な原因であると考ええる。この詩禍の影響が大きく、これまでの観点では江湖詩派は江湖詩禍から始まったと考えられていたが、費君清（1988）は上述の『江湖集』のテキストに対する考察を通じて、江湖詩禍が現れる前から江湖詩派の詩人はすでに詩壇で活躍していたことを発見した。尚清（1987）は宝慶初年の「江湖詩

---

つの標準を定めた。①南宋中後期に生活していた江湖詩人、②愛国精神、民を憂える思想と政治腐敗、社会の暗黒に対する不満感情を持っている詩人、③詩のスタイルは江西詩派と永嘉四霊の詩風と区別がある、④『江湖集』の叢書に詩を収録された詩人、⑤江湖詩派の代表人物、劉過、姜夔、劉克莊、戴復古、陳起らのうちの 1、2 人とはつながりがある。以上の条件が合った詩人は 140 人余りいる。

<sup>29</sup> 胡明「江湖詩派汎論」（『文学遺産』1987 年第 4 期）、梁守中「江湖詩派与江湖派詩」（『中山大學學報』1989 年第 2 期）、牛鴻恩『永嘉四霊与江湖詩派選集』（首都師範大學出版社 1993 年）。以上は永嘉四霊を江湖詩派のメンバーとすることに反対している研究であり、多くは永嘉四霊と江湖詩派が 2 つの詩派であると考ええる。理由としては、永嘉四霊と江湖詩派の詩風は異なっており、江湖派詩人のような朝廷や時事への関心がないと考えている。

<sup>30</sup> 「江湖詩禍」は宝慶三年（1227 年）に済王の廃立をめぐる史弥遠が引き起こした筆禍事件である。臨安書商の陳起が刊行した『江湖集』の一部の詩句が朝廷を譏るものとして問題となった。この事件では劉克莊、陳起、敖陶孫、曾極が巻き添えを受け、その中で敖陶孫と曾極は命を落とすことになった。その後、長年に渡り詩人たちは詩禍の影響を受けることになった。

<sup>31</sup> 張宏生「江湖詩禍考」（『文学研究』1992 年第 1 輯）、この論文は『江湖詩派研究』（中華書局、1995 年）にも収録されている。

禍」で線を引き、江湖詩派の活動を前期と後期に分けた。その後、張繼定（1994）と張宏生（1995）は江湖詩派の活躍の時間を提案したが、現在の学界には統一的な観点は存在せず、おおまかには江湖詩派が南宋中後期に活躍したと考えられている。これで、江湖詩派の基本概念は張宏生の 1995 年の著作の発表後にほぼ確定された。

その後に、思想史と文学史の検討を除くと、テキストの流布と伝播、行謁行為の考証、そしてネットワークの研究などの新しい視点が現れた。そこで 21 世紀初頭、江湖詩派に対する議論が新たな分野に入った。まず、陳書良をはじめとする研究者たち<sup>32</sup>は江湖詩派が置かれている時代背景の特殊性を意識して、それが生まれた社会背景に興味を持ち、江湖詩派の社会背景とその因果関係を検討する文章がたくさん現れた。しかし、検討の結果は張宏生（1995）の見解から外れたものはほとんど無かった。

江湖詩派誕生の要因としては三点挙げられている。第一が社会的要因である。社会構造の変化、人口の急増、土地の合併、科挙の合格の困難さ、インフレーション及び都市部に起った奢侈の風潮が含まれる。第二が文学的要因である。江西詩派の没落の後、南宋四大家、永嘉四靈が出現したものの、江西派に代わる詩派とはなり得なかった。しかし、彼らの存在は江湖詩派に発展の土壌を提供した。そして当時、詩社または他の交遊方法が普及したことも第二の要因に含まれる。また、陳起の組織的役割や劉克莊の指導的役割など、個人的な要素を含むのが第三の要因である。江湖詩派と形成された原因について詳細に検討した<sup>33</sup>。

江湖詩派の行謁行為は研究者から注目されており（注 9 を参照）、その行為をもって江湖詩派を低く評価する向きもある。費君清（2005）<sup>34</sup>は、これまで研究者たちが「行謁」という行為を重視しすぎていたと考えているが、実際に高級官僚に行謁して豊かな財産を手に入れることができる詩人は少数にすぎず、多くは親戚や友人に頼って、援助を受けて生計を立てていることを指摘している。江湖詩人の経済基盤は多岐にわたる。楊理論、駱曉倩<sup>35</sup>たちはさらに江湖詩派の宗室詩人集団が行謁の行為をすることはないことを考察

---

<sup>32</sup> 陳書良「試論書商陳起對於南宋江湖詩派的作用」（『湖南商学院学報』2004 年第 4 期）、陳書良「略論江湖詩派產生、發展的原動力」（『船山学刊』2004 年第 4 期）、李琳「江湖詩派盛於南宋之原因探究」（『樂山師範学院学報』2004 年第 4 期）、李湘樹「喚起江湖千古事一讀陳書良新著『南宋江湖詩派与儒商思潮』」（『書屋』2005 年第 1 期）、費君清「詩工命窮一論南宋江湖詩人的悲劇人生」（『浙江大学学報（人文社会科学版）』2005 年第 6 期）、張春媚『南宋江湖文人研究』（武漢大学博士学位論文 2005 年）、耿春紅「經濟依存与職業独立—南宋江湖詩派個案研究」（『河北師範大学学報（哲学社会科学版）』2008 年第 3 期）、趙海霞、胡字慧「江湖詩派形成初探」（『内蒙古工業大学学報（社会科学版）』2010 年第 2 期）、曾維剛「論南宋中興時期江湖詩產生的社会文化基礎」（『蘭州大学学報（社会科学版）』2010 年第 4 期）などを参照。

<sup>33</sup> 張宏生『江湖詩派研究』（中華書局、1995 年）の第一章を参照。

<sup>34</sup> 費君清「南宋江湖詩人的謀生方式」（『文学遺產』2005 年第 6 期）を参照。

<sup>35</sup> 楊理論、駱曉倩「略論江湖詩派中的宗室詩人」（『重慶師範大学学報（哲学社会科学版）』2012 年第 5 期）を参照。

した。阿部順子（2015）<sup>36</sup>はさらに、詩人の行謁には、朝廷政策への参加を求めるいくつかの意味があると考えている。

近年の先行研究の中で筆者が興味深い点は江湖詩派のネットワークの研究である。これまでの江湖詩派メンバーの交遊に関する考察では、江湖詩派メンバーの出身地を区別することが多かった。劉曉旭（2014）<sup>37</sup>は、江湖詩派のメンバーを両浙路詩人、江西路詩人、福建路詩人の3つの主要な詩人グループに大別した。しかし、劉曉旭の視点は主に文学鑑賞及び江湖詩派メンバーの思想と群体イメージに注目しているが、それは交遊関係に注目する孫培（2023）と比べて、江湖詩派メンバーの区別があいまいである。孫培は依然として江湖詩派を3つの部分に分けている。両浙東西路の詩人グループ、福建路の詩人グループ及び江南東西路と淮南東路の詩人グループ。その中で、江南東西路と淮南東路を除いて、他の地域には明らかな交遊圏が形成されている。両浙東路は「永嘉四靈」を中心として形成された唱和圏を形成した。両浙西路は陳起を中心に、葛天民と孫惟信を中心詩人とした西湖唱和圏を形成した。福建路は劉克莊と、胡仲弓・胡仲參兄弟を中心とした2つの唱和圏がある。この4つの唱和圏のほかに、長年にわたって隈なく歩いてきた「江湖遊士」を中心とした小さな唱和圏もある。例えば、両浙東西路の戴復古と李龔を中心とした唱和圏、および江南東路の姜夔、方岳を中心に、淮南東路は陳造らを主要メンバーとする小規模な唱和圏があった。江湖詩派内部の交遊関係はかなり複雑で、小さい唱和圏の中心人物と大きい唱和圏の中心人物がつながり、そしてそれぞれの大きい唱和圏の中心人物の間にまたつながりがあると簡単に理解することができ、最後に江湖詩派の「最終連絡人」の陳起が分散したそれぞれの特色のある群体を『江湖集』を通じて集結させ、汎詩派社会群体を形成した。これも陳起がそれほど深く交わりのない江湖派詩人から詩文を網羅して出版できた理由でもある<sup>38</sup>。

上述の孫培の著作において江湖詩派のネットワークに対する考察はすでに入念に行なわれているが、筆者は多くの問題点が存在すると考えている。よく知られているように、江湖詩派のメンバーには江湖遊士が多く、しばしば彼らがあちこちで行謁している。行謁の必要がない中下層の官僚たちであっても、多くの宦游（官僚を就任するための移動）の経験があるだろう。孫培はこれらの江湖詩派のメンバーの「移動」によって、江湖詩派のネットワークが地域をまたいだ唱和圏を形成した。一方で、移動によって長期間に固定的な唱和圏を形成できないことが分かったと考えている。また、侯体健（2017）の文章では、「江湖詩派」のメンバーを動態的な視点で見るべきだと考えており、江湖詩派のメンバーは社会的地位の変化に伴い「非」江湖詩派の身分となる現れる可能性がある。筆者は彼ら

---

<sup>36</sup> 阿部順子「謁客の詩」（内山精也 編『南宋江湖の詩人たち—中国近世文学の夜明け』勉誠出版、2015年）を参照。

<sup>37</sup> 劉曉旭『南宋中後期江湖詩人群体研究』（復旦大学修士学位論文、2014年）を参照。

<sup>38</sup> 孫培『南宋江湖詩派の群体性と地域性考察』（四川大学出版社、2023年）を参照。

の交遊関係に対する考察において、これまで単に江湖詩派詩人たちの出身地だけで区別していた考察モデルではなく、「動的」な視点を採用すべきだと考えている。加えて、劉克莊と江湖詩派のメンバーとの交遊の時期の時間軸を設定して考察する。このようにして空間と時間の上から更に江湖詩派のネットワークの特徴を検討する。

## （２）劉克莊に関する先行研究

江湖詩派に対する先行研究では、江湖詩派全体のネットワークの考察が行なわれる他、江湖詩派の個別研究も行なわれており、主に数人の重要な詩人に関心が集まっている。江湖詩派のメンバーを定義するためには江湖詩派のネットワークを考察する必要があり、重要な江湖詩派の詩人同士の交遊関係に多くの研究成果がある。「永嘉四靈」はもちろん、戴復古、林希逸、陳起などにも多くの考察がある。その中で江湖詩派のリーダーである劉克莊の考察が重要なのは言うまでもない。

劉克莊（1187-1269）は福建路興化軍莆田県の人、字は潜夫、号は後村である。彼は江湖詩禍の当事者であり、その詩論の評価が高いことで多くの江湖派詩人が崇拜し、江湖詩派のリーダーと目されてきた。彼は江湖詩派の中で高い地位を保っているだけでなく、南宋詩壇での地位も高い。現在、百九十六巻に及ぶ膨大な『後村先生大全集』が残っている。劉克莊に関する研究では主に彼の文学作品に注目が集まっており、校閲した詩・詞・詩論・散文・題跋などの資料が豊富である。その中で程章燦の年譜<sup>39</sup>と向以鮮、王栄貴が校正した『後村先生大全集』<sup>40</sup>及び辛更儒が校注した『劉克莊集箋注』<sup>41</sup>が最も多く用いられている。その生涯の研究としては日本では中砂明德<sup>42</sup>、中国台湾では孫克寛<sup>43</sup>による研究があり、中国大陆では向以鮮<sup>44</sup>の研究を最も権威としている。劉克莊の交遊関係の考察も多くの研究<sup>45</sup>がある。その多くは劉克莊と一部の人々との人間関係を考察することに関心が

<sup>39</sup> 程章燦『劉克莊年譜』（貴州人民出版社、1993年）を参照。

<sup>40</sup> 向以鮮、王栄貴 校点『後村先生大全集』（四川大学出版社、2008年）を参照。

<sup>41</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』（中華書局、2011年）を参照。

<sup>42</sup> 中砂明德『劉後村と南宋士人社会』（『東方学報』1994年巻66）を参照。

<sup>43</sup> 孫克寛「晩宋詩人劉克莊補伝初稿」（『東海学報』第3巻第1号）、「劉後村の家世与交遊——劉後村与晩宋政治之一」（『大陸雜誌』第22巻第12号）、「晩宋政争中之劉後村——劉後村与晩宋政治之二」（『大陸雜誌』第23巻第7号）。以上の三つの文章は閻君禄「後村研究講評」（『宜賓学院学報』2003年第1期）と王述堯「劉克莊研究総述」（『古典文学知識』2004年第4期）に言及されているが、いずれも年代を表記していない。まだ筆者はこれらの論文を入手できない状態で、確認もできない。

<sup>44</sup> 向以鮮『超越江湖的詩人——後村研究』（巴蜀書社、1995年）を参照。

<sup>45</sup> Patricia B.Ebery, "The Women in Liu Kezhuan's Family," *Modern China* 10-4, 1984. 陳慶元「劉克莊和閩籍江湖派詩人」（『閩江学院学報』1995年第2期）、胡俊林「柳暗花明又一村——南宋江湖派詩論探索之一」（『内江師範高等専科学校学報』1999年第1期）、小林義広「南宋期における福建中部の地域社会と士人——劉克莊の日常の活動と行動範囲を中心に」（『東海史学』2001年第36巻）、許麗莉「劉克莊親族仕潮考」（『玉溪師範学院学報』2006年第8期）、許麗莉「劉克莊与仕潮知州交遊考」（『湖州師範学院学報』2008年第3期）、周炫、陳建森「從師友交遊看劉克莊的文学及仕途」（『學術研究』2011年第9

集まっている。例えば、福建路の江湖派詩人との関係、潮州知州との関係、趙氏宗室詩人との関係、及び師承関係からの考察は、全面的ではないが、本稿に大きい示唆を与えた。その中で平田茂樹（2022）と孫培（2023）の文章の成果が最も豊富だ。平田茂樹の文章は劉克莊の生涯全体の交遊関係について考察し、主に3つの空間に分けた。第一は郷里の莆田県を中心とした空間、第二は県、州、道の地方官僚として活躍する空間である。三つ目は首都臨安（杭州）を中心とした空間である。しかし、劉克莊と江湖詩派のメンバーに注目してのではなく、劉克莊の生涯全体における交遊関係に注目して考察した。一方、孫培（2023）では陳慶元（1995）の研究よりも詳細であり、劉克莊と江湖詩派のメンバーとの関係を考察している。孫培は劉克莊を福建路の中心人物として江湖詩派のメンバーの考察を行った。劉克莊の居郷期間に限定して劉克莊の交遊関係の考察を行っており、地方官と朝官を務めている期間の交遊については考察されていない。孫培の著作のみにもとづいて考えると、劉克莊の江湖詩派内部の交友圏は福建路に限られていると勘違いしてしまうかもしれないが、実際にはそうではない。筆者は劉克莊を中心とした交遊関係の分析について、孫培が提唱した出身地を中心に交遊関係を考察するモデルに新視点を提示することを試みたい。そこで筆者は劉克莊の江湖詩派との交遊について、官途につく前の交遊時期、中年期の地方官の時期、晩年期の福建路福清林氏と交遊時期という三つの時期に分けて考察する。劉克莊は地方官を務め、各地を転々としていた時期にはすでに江湖詩派の交友圏の中にいた。中年になってからは江湖詩派詩人と安定的に交流していた。晩年のほとんどの時期では郷里で福清県の林希逸と林同としか交遊していなかった。筆者は本稿において、孫培の研究モデルに新しい視点を提供し、劉克莊を中心とする江湖詩派のネットワークを時系列に沿って整理する。劉克莊の生涯の中で形成された各種の江湖詩派の交遊グループを詳細に分析する。

次章以降において、それぞれの交遊状況を分析していく。

### 3. 劉克莊を中心とする江湖詩派のネットワーク

孫培（2023）によると、劉克莊は両浙路と福建路の詩人ネットワークにおいて中心的な役割を果たしていた人物達と関係を持っていた。両浙東路では永嘉四靈と薛師石を中心としてネットワークを構成しており、劉克莊は趙師秀と翁卷と交遊していた。両浙西路は陳

---

期)、楊理論、駱曉倩「略論江湖詩派中的宗室詩人」(『重慶師範大學學報(哲學社會科學版)』2012年第5期)、周炫「劉克莊与王邁、林希逸的文学交遊述考」(『湖南社會科學』2014年第4期)、侯体健「南宋祠祿官制与地域詩人群體:以福建為中心的考察」(『復旦學報(社會科學版)』2015年第3期)、平田茂樹 著、胡勁茵 訳「南宋士大夫劉克莊的交遊空間与社会網絡」(『大阪公立大學東洋史論叢』2022年第22号)(初出は『宋代政治的空間与結構:科舉社会的「人際網絡」研究』(浙江古籍出版社、2023年))、孫培『南宋江湖詩派的群体性与地域性考察』(四川大學出版社、2023年)などを参照。

起交友圏と西湖交友圏に分かれている。劉克莊と陳起の関係はすでによく知られている。西湖唱和圏は葛天民と孫惟信が中心となっており、劉克莊は孫惟信と交遊していた。彼ら以外に劉克莊は両浙東西路のネットワークに属している漫遊型詩人の戴復古と交遊している。劉克莊の故郷である福建路では、劉克莊は交遊圏の中心的人物である。また、劉克莊は胡仲弓兄弟を中心にする唱和圏に属し、彼らとも交流を持った。江南西路の江湖派詩人たちは明らかな交遊の中心を形成しておらず、しかしながら、劉克莊はそこにおける宋自遜、趙汝錡、曾極などの詩人たちと交遊関係を有している。劉克莊の交遊ネットワークは、江湖派詩人たちの主要な集まる場所をほぼ網羅する。

筆者は劉克莊の史料及び関連する工具書から、交遊関係が明確に記載されている江湖詩派のメンバー24名を整理した<sup>46</sup>。また、4人（周端臣、許棐、武衍、朱南傑）の江湖詩派のメンバーが残した史料には劉克莊の文学作品に対する評価しか見られず、相互往来を示す史料はほとんど残っていない。双方向交流があるかどうかは確定できないが、劉克莊の江湖詩派内部における影響力を証明するには十分である。張宏生（1995）の研究によれば、劉克莊との交遊関係を持つ合計24名の詩人のうち、福建路出身者8人、両浙東路出身者7人、両浙西路出身者3人、江南西路出身者6人である。劉克莊と交遊している24人の中でも、福建地域の江湖派詩人とは最も密接な関係がある。身分から見ると、内山精也<sup>47</sup>の文章では江湖詩派の138人のうち、少なくとも78人が下層官僚以上の身分で、半数を占める。しかし、劉克莊と交遊している24名の江湖派詩人のうち、18人は少なくとも下層官僚（1人は上層官僚、6人は中層官僚、11人は下層官僚<sup>48</sup>）だった。75%を占め、割合は非常に高い。これによって、劉克莊の江湖詩派における交遊の傾向が明らかである。

### （1）官途につく前の交遊関係

#### a 血縁関係を持つ江湖派詩人

劉克遜（1189—1246）、字は無競、号は西墅である。劉克莊の弟である。福建路興化軍莆田県で生まれた。兄弟間の交遊は先行研究にほとんど言及されていない。その理由はよくわからないが、劉克莊と劉克遜の交遊は少なくない。劉氏兄弟の交流は主に3つの時期に集中しており、一つ目は1189年から1209年の子どものごろから劉克莊がはじめて官

<sup>46</sup> 計28名のメンバーのほか、孫培（2023）では「朱繼芳」と「張弋」が劉克莊と交遊関係を持つと考えている。しかし、孫培は史料で証明をしておらず。筆者は史料を検索しても彼らの交流の痕跡は見えない。

<sup>47</sup> 内山精也「宋詩能否表現近世」（周裕鍇 編『第六届宋代文学国際研討文集』（巴蜀書社2011年）を参照。

<sup>48</sup> 内山精也（2011）の研究によると、上層官僚とは中央レベルの朝官を指し、中層官僚は路と州レベルの長官を指し、下層官僚は前述の官僚を除く地方官僚を意味する。また、上層官僚は劉克莊と林希逸の2名のみであり、中層官僚も14名に過ぎない。これにより、江湖派詩人の大部分は地方官僚レベルに留まっていることが明らかである。

僚になる時期までである。二つ目は 1237 年から 1240 年までの嘉熙年間に、それぞれ地方官となる時期である。特に劉克莊の知袁州期間の交遊が重要である。三つ目は、1244 年に劉克遜の長男である劉偉甫が亡くなってから、1246 年に劉克遜が亡くなるまでである。

『後村先生大全集』巻 5「發臨川」に、

始予卅角來，家君綰銅墨。縣齋多休暇，縣圃足戲劇。雖云嗜梨栗，亦頗窺簡冊。弟妹皆孩幼，親髮方如漆。

（劉克莊は子供の頃に一度、臨川県に訪れ来た。その当時、父は撫州臨川県の知県を務めていた。臨川県の学塾は休みの日が多く、県圃で演劇公演も頻繁に行われたのである。梨や栗が好きといっても、本をよく読む（遊びも勉強も楽しんでいた）。弟と妹もまだ幼いので、家族揃って親密に過ごすことができた。）

と、程章燦の劉克莊年譜では、嘉泰元年（1201）、二人の父劉弥正が江南西路の撫州臨川県の知県を務めた。劉克莊と弟妹は父に従って江南西路撫州臨川県へ行って、県齋で学んだことがわかる。嘉泰四年（1204）、劉弥正が入朝した。劉克莊と劉克遜も一緒に臨安へ行って、その後に国子監生となる。

『後村先生大全集』巻 112「雜記」に、

余開禧乙丑補入參果行，仲弟無競、從弟志學參持志，與安晚同齋，余因二弟識之。

（私は開禧乙丑年（1205 年）に国子監の補試を経て入学し、果行という学舎に編入された。私の二弟である劉克遜（字は無競）、及び従弟である劉希醇（字は志学）は、持志という学舎に編入し、鄭清之（号は安晚）と同じ学舎に在籍していた。私は二人の弟のために鄭清之と知り合い始めた。）

と、劉克莊と鄭清之（号は安晚）は弟たちを通じて知り合ったことがわかる。このように他人を通じて紹介し合うことは、江湖詩派のネットワークでは珍しくない。管見の限り、二人の間には鄭清之以外にも、葉適・林公遇・林希逸・戴復古・方大琮・王邁などの複数の共通の親友が存在する。そして、嘉定二年（1209）、23 歳の劉克莊がはじめて靖安主簿になるまで、劉氏兄弟の人生の軌跡は同じであるため、二人の交遊はかなり多かったはずだが、これを示す史料はほとんど残っていない。

辛更儒の校注によれば、嘉熙元年（1237）、劉克莊は袁州知州に転任し、邵武軍へ経過した。この時、劉克遜は邵武軍知軍だった<sup>49</sup>。『後村先生大全集』巻 153「工部弟」墓誌銘に、

嘉熙改元，予蒙恩守袁。道樵，無競弟作牧，對榻郡齋累夕，語輒達旦。相與歎曰：「仕所以養親，太夫人薄榮利，安輿跬步，不去鄉井，吾兄弟惟有早退爾。」

（嘉熙元年（1237 年）、私は皇恩により袁州知州を務めさせた。袁州へ赴任の途中、邵武軍を經由し、弟の劉克遜が邵武軍知軍として勤めていた。私たち兄弟は郡齋にて

<sup>49</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』（中華書局、2011 年）6020 頁、箋注（一）を参照。

夕方から朝まで語らい、相對してため息をつきながら、次のように語り合った。「私たちが官僚となるのは、家族(母を指す)に仕えるためである。母は名利と富を薄く、乗用車に乗って小走りに移動し、田舎を離れず、私たち兄弟は早く致仕するしかない。」)

と、二人が面会した際に徹夜で話していたことがわかる。また、談話の内容について『後村先生大全集』巻11「仲弟和十首」の第八首に、

弟兄雖幸忝朱輪，各是人間五十人。只合共娛千歲母，可能少補二州民。

(兄弟二人はともに官位の昇進において幸運を恵まれており、その結果、50代を迎えた。高齢の母親を共に養う義務を負うこととなり、それぞれが管理する2つの州の人々にたいしても借りがあると言えるでしょう。)

と同じくものが記録されている。この時の兄弟二人は母の養老問題と官途の考えをテーマにした唱和だった。忠と孝が両立できない問題は士大夫官僚たち一生の命題である。この談話以外、『後村先生大全集』巻99「仲弟詩」も残る。辛更儒の校注によれば、これは嘉熙三年から嘉熙四年の間(1239—1240)に書いた題跋だとしている<sup>50</sup>。よって、劉氏兄弟は1237年の短い出会いの後、二人の交流も少し多くなったことがわかる。

その六年後、劉克遜は亡くなった。程章燦の劉克莊年譜によると、劉克遜は淳祐六年(1246)12月に亡くなった。この時、劉克莊はまだ中央にいて、1247年の初めに故郷に帰った時、劉克遜のお墓しかなかったという<sup>51</sup>。そして、『後村先生大全集』巻16に収録されている「九日登辟支巖過丁元暉給事墓及仲弟新阡二首」という詩を詠み、悲しみを吐露している。同巻16「工部弟哀詩二首」の二に、

去歲書來欲解麾，數行遺墨半傾欹。

(前年、手紙を通じて退職を希望する考えを示された。その手紙には、数行の書体が傾いている様子が見受けられる。これは、体の調子が悪く、手紙をきちんと書くことができなかったためである。)

という言葉がある。その頃の二人の交流の過程を垣間見ることができる。もっと詳しい情報は同巻153「工部弟」の墓誌銘に、

於是無競書來，首末自札僅數行，中間累千百言，令興甫代作，曰：「某自夏涉秋苦胸腹堅痞，醫不能治。身若此，如千萬戶何！不去必死官下。」詞甚悲哀。亟白於朝，諸公曰：「是欲脫凋郡者，豈必真病？」余流涕曰：「弟他日未嘗如是，非偽也。」改知袁州，不候代歸。及升堂拜太夫人，疾稍愈。袁復縮戍，無競書又來曰：「久羸未任勞苦，願少休息。」朝論諒其情實，除直秘閣、主管崇禧觀。命下疾革，(中略)娶宜人方氏。子二人：偉甫，將仕郎，風度玉立，入京銓注，以疾客死，無競鍾愛，以至於病；

<sup>50</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』(中華書局、2011年)4145頁を参照。

<sup>51</sup> 程章燦『劉克莊年譜』(貴州人民出版社、1993年)210—225頁を参照。

（劉克遜（字は無競）から手紙が届いた。その手紙において、冒頭と結末の数行は彼自身で書いたものであり、中間の数行は劉周士（字は興甫、劉克遜の息子）によって代筆されたものである。「夏から秋にかけて、胸腹部の閉塞感に苦しみ、医者が治療できなかった。体はまだ持ちこたえているが、千百戸の庶民をどのように扱うべきか。官僚となるべきか、あるいは途中で死んでしまうべきか。」その文字には悲しみがにじみ出ており、私はこのことを朝堂で述べた。朝官の皆さんは、「彼（劉克遜）は県の庶民から抜け出そうとしているに違いない。必ずしも本当の病気ではないだろう。」と指摘した。私は涙を流して、「私の弟が以前はそうではなかった。仮病ではない」と主張した。私は袁州知州に転任し、代理人を待たずに故郷に帰った。堂に上がり、母に会った時、彼の病状は少し改善していた。袁州はまた軍備を縮小した。この時、劉克遜の手紙がまた届き、「病弱になって久しく、まだ職場に復帰していないので、少し休みたい」と述べていた。朝堂の皆さんは彼の状況を理解し、彼を直秘閣学士で崇禧觀の祠禄官に任命した。人事命令が下った直後、劉克遜の病状は深刻化した。（中略）劉克遜は方宜人と結婚し、2人の子供をもっていた。その一人は劉偉甫で、將仕郎に至った。風格を持ち、玉立っていたが、入京して銓選に参加する途中、病気で他郷に亡くなった。劉克遜はこの息子を非常に愛し、その死によって病気になった。）

と記載される。また同巻 151「少奇」の墓誌銘によると、劉克遜の長男劉偉甫（字は少奇）が淳祐四年（1244）入京の途中で亡くなった<sup>52</sup>。彼の死も、劉克遜が病に罹り死亡した要因の一つとなった。劉克遜が亡くなった後、『後村先生大全集』巻 138「工部弟」祭文、巻 172「魏国追薦工部弟」、「追薦工部弟」、「代追薦工部」、「代作工部弟中祥」、「代追薦工部弟大祥」には多くの祭文、青詞が残されている。劉克壯が弟の死に際して受けた衝撃や悲しみが見て取れる。その後淳祐八年（1248）、劉克莊の母林氏も亡くなり<sup>53</sup>、二人の肉親の死は晩年の劉克莊に大きな打撃を与えた。

以上から、劉氏兄弟の交遊については記録こそ少ないものの、二人の関係の緊密さが窺える。また二人は血縁関係にあるため、詩文の交流のほか、母親の養老問題についても交流している。二人の兄弟間の交流内容は、劉克莊が他の江湖派詩人と交流する際には出てこない内容である。また、兄弟のために人間関係に多くの重なりがあり、『両宋名賢小集』巻 275 戴復古の「訪古田劉無競」という詩に、

前説建陽宰，古田今似之。難兄與難弟，能政更能詩。

（劉克莊、建陽県知県を務めた人物であり、現在の古田県知県である劉克遜も彼に似

<sup>52</sup> 『後村先生大全集』巻 151「少奇」の墓誌銘に「以父任補將士郎，淳祐甲辰（1244），年三十矣。入京銓試，得瘡下疾，服藥灼艾不愈，以六月甲午卒於客邸。」とある。

<sup>53</sup> 『後村先生大全集』巻 153「魏國」墓誌銘に、「太夫人以太盛爲憂，謙挹滋甚。年齡雖高，稟賦素實，服食惡補助，喜疏利。晚嗜建茗冰糖，得瘡下疾，既止復作，薨於寢，年八十有八，淳祐八年（1248）十月己卯日也。」とある。

ていると言える。劉氏兄弟は難兄難弟であり、県城を管理する一方で優れた詩を創作することができるとされている。)

とあり、二人の任官経歴と仕事ぶりにも多くの類似点があるとわかる。江湖詩派の中には兄弟や親子が同じ江湖詩派のメンバーである例も少なくない。本文では劉氏兄弟のほか、胡氏兄弟（胡仲弓、胡仲参）や林氏兄弟（林同、林合）についても言及する。

#### b 撫州臨川の宋氏

宋自遜（生没年不明）、字は謙父、号は壺山居士である。金華人だが、江南西路隆興府南昌に住んでいる。方回の『瀛奎律髓』巻二十に、戴復古の「寄尋梅」について以下のことを議論した。

慶元、嘉定以來，乃有詩人為謁客者。龍洲劉過改之之徒不一人，石屏亦其一也。相率成風，至不務舉子業。干求一二要路之書為介，謂之‘闊匾’，副以詩篇，動獲數千緡，以至萬緡。如壺山宋謙父自遜，一謁賈似道，獲楮幣二十萬緡，以造華居是也。錢塘湖山，此輩什佰為群，阮梅峰秀實、林可洪山、孫花翁季蕃、高菊磻九萬，往往雌黃士大夫，口吻可畏，至於望門倒屣。

（慶元（1195 年～1200 年）から嘉定（1208 年～1224 年）年間において、謁客詩人が存在した。龍洲の劉過（字は改之）に限らず、戴復古（号は石屏）もその一人である。彼らは行謁の気風を形成し、科挙の正業を誤らないようにした。州官 1、2 人に「闊匾」と呼ばれる手紙を媒介として、詩を添えて献上する例があった。時には数千貫の銭を得ることさえあり、甚だしきには万貫の銭を得ることもできた。例えば、壺山の宋自遜（字は謙父）が賈似道に行謁した際には、紙幣 20 万貫を手を得た。これは豪華な居間を作るために使用された。錢塘湖山地域では、阮秀実（号は梅峰）、林洪（号は可山）、孫季蕃（号は花翁）、高九万（号は菊磻）らが士大夫を妄言し、口ぶりが恐ろしいとされる。彼らを入り口として見ると、靴をなくしてもドアを閉めなければならなかった。）

と、それ以外に『後村先生大全集』巻 90「専壑堂」の記には、以下のように取り上げられている。

謙甫少所交皆海内長者，歳晩凋謝略盡，謙甫亦老，頼故人天台賈公力，買田築室於西山之下，而請余記其所謂専壑堂者，曰：「吾生讀書於是，死埋骨於是矣。」

（宋自遜（字は謙父、また謙甫とも記載される）は少年期に付き合った人々が、四方からの長者であり、年をとるにつれて次々となくなった。宋自遜自身も歳をとうにつれて、故人の天台人賈似道の力を借りて、西山の下に田んぼを買い、居室を建設した。その後、私（劉克莊）は彼から「専谷堂」と呼ばれる場所について「記」を書くよう依頼された。彼は「私は生きている間ここで学び、死んでから骨をここに埋葬する」

と述べた。)

上記の方回の記述から、宋自遜が賈似道に行謁した者として世に知られており、戴復古、劉過、孫惟信（字は季蕃）、高翥（字は九万）らといずれも卑劣な行謁詩人と考えられている。しかし、宋氏の生涯、家族、江西地方の詩人のネットワークを詳細に検討した熊海英（2020）<sup>54</sup>では、そのようには考えられていない。宋氏の本籍は婺州で、宋自遜の父宋銓には五男五女がいる。宋自遜は宋氏家族の中で唯一の江湖派詩人であり、詩文で有名な宋氏一族で最も有名な詩人でもある。『後村先生大全集』巻 101 には「宋氏絶句詩」、「宋吉甫和陶詩」、「宋自達梅谷序」、「宋自達詩」など多くの題跋があり、宋氏一族のほとんどの詩人が自分の詩集を有している。そのため、熊海英（2020）は賈似道の贈金行為がすでに詩の名が高くなっている宋自遜に対し尊敬の意を表すが故の行為である可能性があると考えている。

『後村先生大全集』巻 101「宋自達詩」に、

金華宋氏有丈夫子六人，僑居豫章，余少時皆識之。

（金華宋氏は夫あり、子供を 6 人いる。豫章に居住している。私は幼少期から彼らと知り合い、交流を続けている。）

とあり、宋自遜とその家族が劉克莊と知り合ったのが早いことがわかる。熊海英（2020）によれば、嘉泰年間（1201—1204）、劉克莊は父劉弥正に従い江南西路撫州臨川縣へ赴いた。宋氏との交遊はこの時から始まった。その後、嘉定三年（1210）に劉克莊は隆興府靖安縣主簿に転任し、再び江南西路に赴いた。その際に宋氏一族と接触した可能性もあると指摘する。

劉克莊と宋自遜の付き合いは『後村先生大全集』巻 16「題宋謙父四時佳致樓」と「題宋謙父詩卷」から見える。辛更儒の校注によると、これらの詩は 1244 年から 1247 年までに書かれている<sup>55</sup>。また、『後村先生大全集』巻 101 にある前述に提起した複数の題跋は 1245 年から 1246 年の間に書かれており<sup>56</sup>、これによって、劉克莊と宋氏一族の交遊関係が長く続いていたことがわかる。後述するが、筆者は臨安にいる劉克莊の社友グループに対する考察の中から、多くの詩人が江南西路に行った経歴があることを発見している。熊海英（2020）の研究によれば、臨安にいる劉克莊の社友戴復古、曾極、高翥らも宋自遜の友人である。

### c 江湖詩派の前期詩人たち

①敖陶孫（1154—1227）、字は器之、号は臞庵と臞翁である。福建路福州福清縣の人で

<sup>54</sup> 熊海英「南宋江湖詩人宋自遜の家世生平与交遊創作考論——兼及对南宋「江湖詩人」和「江湖体」的再認識」（『湖北大学学报（哲学社会科学版）』2020 年第 1 期）を参照。

<sup>55</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』（中華書局、2011 年）893 頁を参照。

<sup>56</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』（中華書局、2011 年）4221 頁を参照。

ある。劉克莊が誕生した時に敖陶孫はすでに 34 歳だった。劉克莊とは年齢の垣根を越えた付き合いをしている。敖陶孫はその生涯において、二つの詩案に直面した。慶元詩禍と江湖詩禍である。この二つの詩禍については、史料には多くの記述があるが、いずれも矛盾点がある。前者については常德栄（2010）<sup>57</sup>、後者については張宏生（1992）<sup>58</sup>において詳しく考察されている。

江湖詩禍については上述したため、ここでは慶元詩禍について簡単に紹介する。慶元詩禍が発生する前、当時の士人たちは韓侂胄の党に不満を抱いていた。よって当時の太学生たちは様々な抵抗活動を行なった。そしてある太学生が敖陶孫の名を借りて、酒楼の壁に「悼趙忠定」という詩を書いたことが発覚し、それを知った韓侂胄は不快感をあらわにする。そして臨安知府は韓侂胄の意を忖度して敖陶孫を逮捕しようとした。敖陶孫は服を着替え、名前を変え、故郷へ逃走した。しかし士卒は福建路まで追いかけて彼を捕らえ、都へ連行した。敖陶孫が韓侂胄に詩は自分が作ったものではないと弁明すると、韓侂胄は敖陶孫を罪に問わず、福建路に帰籍させるという処分のみを課した。慶元詩禍は、韓侂胄らが朝政を統制する過程の中で世論を統制しようとした事件であった。その後の江湖詩禍も権臣が世論をコントロールしようとした事件であり、張宏生の検討によれば、江湖詩禍の中でも敖陶孫は他人に罪を着せられている。そして慶元詩禍ほどの幸運は起らず、名誉が回復されることはなかった。

劉克莊との交遊について、程章燦は『後村先生大全集』巻 1 に収録されている「別敖器之」という詩をもとに、劉克莊が臨安にいた 1208 年から 1209 年の間に敖陶孫と交遊関係を持っていたと考察している<sup>59</sup>。辛更儒も「別敖器之」の「輕煙小雪孤山路，折牘梅花寄一枝。」<sup>60</sup>という一節をもとに考察している。「輕煙小雪孤山路」の中にはまた田舎を指す「輕煙」があり、また臨安の地名「孤山路」がある。これは劉克莊が田舎にいた時に敖陶孫を見送り臨安に行ったことを指すと考えられている<sup>61</sup>。この考察は程章燦とは正反対である。どの考察が正しいのか、筆者はまだ解を得てはいない。しかし、『江湖小集』巻四十五、『敖陶孫臞翁詩集』の中の「詩評」に、

此評子姪得之為多，外自寫兩紙，其一以遺莆陽劉潛夫，其一以遺同舍朱仁叔，二公皆知詩者，且其語臺臺逼人，故為之書。

（この詩評は私の子供と甥が手に入れた人が多い。私は別に 2 部を書き上げており、そのうち 1 部は莆陽の劉克莊に贈呈し、もう 1 部は同舍の朱仁叔に贈与した。2 氏は

<sup>57</sup> 常德栄「南宋詩人敖陶孫考論」（『陰山学刊』2010 年第 6 期）を参照。

<sup>58</sup> 張宏生「江湖詩禍考」（『文学研究』1992 年第 1 輯）を参照。

<sup>59</sup> 程章燦『劉克莊年譜』（貴州人民出版社、1993 年）20—21 頁を参照。

<sup>60</sup> ここは「あちこちから煙が立ち、細雪が舞い降りる中、孤山を目指しながら、梅の枝を折ってあなたに贈る。」と訳す。

<sup>61</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』（中華書局、2011 年）33 頁、箋注（一）を参照。

共に詩を深く理解し、また彼らの文章は先人を凌駕していると同時に、とくにそのような理由から詩評を彼らに書き上げ、送ることを決意した。）

とあり、直後に「嘉定八年夏至後二日」という記年がある。二人が1215年にも交遊していることは確かである。そして詩評を贈るという行為から言えば、敖陶孫は劉克莊に対して称賛を送り、信頼していることが分かる。二人は1215年前から長い間交遊関係を持っていた可能性があると考えている。

嘉定年間（1208—1210）の交遊以外にも、敖陶孫が致仕した後の1223年に二人は再び交遊している。この時は劉克莊も故郷に住んでいた。『後村先生大全集』巻7「敖器之宅子落成」に見られるように、二人とも福建路の人であるため、敖陶孫の住所へ行ったことのある可能性が高い。後述する同じ福建路福州福清県の林氏兄弟の住所も、劉克莊が詳細に記録している。よって、筆者は同じ福建路の詩人が交際する際に、互いの住まいへ行く習慣があったのではないかと推測する。

このほか、『後村先生大全集』巻7には「答敖茂才」と「敖茂才論詩」という2つの詩がある。辛更儒の校注によれば、敖茂才は敖陶孫の甥である<sup>62</sup>。内容からして、後輩の詩学教育に対する強い責任感を持っていたようだ。同巻148「臞庵敖先生墓誌銘」には敖陶孫の妻に対する記載があるが、子女の記載はない。故に、敖陶孫が致仕した後、甥と劉克莊を引き合わせるつもりであったのかもしれない。「答敖茂才」にある「桐城逢汝伯，一爲說相思。（劉克莊が桐城にて、敖茂才の叔父である敖陶孫と偶然出会いましたので、彼への思いが敖茂才を通じて伝えていただきたい。）」という一節は、敖茂才が敖陶孫を通じて劉克莊と知遇を得ることができることを示している。

『後村先生大全集』巻148「臞庵敖先生」墓誌銘に、

先生早游學四方，所交類當世聞人。白首還鄉，輩行將盡，名理幾熄，深居罕出，客至從戸内搖手謝絕之，新學晚生少覲其面，至疑先生眉宇有異。獨喜與太學博士李君韶、監南嶽廟林君公遇還往，若余者亦先生所素厚也。

（敖陶孫先生は早年、各地を訪れながら学びを積んできた。付き合っていた人々は、その当時の世に名を知られた方々であった。年をとって故郷に帰ると、世代はほぼ最も高かったが、体調も弱くなっていた。家から出てこないために、お客様が門前まで来た際には、敖陶孫先生は窓から外を向いて手を振って、面会を断る。私（劉克莊）は遅く生まれ、先生に会う機会は多くなかった。先生の顔が以前と変わらないかと疑問に思った。先生は太学博士である李君韶氏と南岳廟を管理する林公遇氏と交流しており、私のような者に対しても、深く接していただいた。）

と、敖陶孫と晩年はあまり交遊しなかったことがわかる。その理由は「然先生詩名益重，托先生以行者益衆，而《江湖集》出焉。會有詔毀集，先生卒不免。」という文の中で説明

<sup>62</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』（中華書局、2011年）431頁、箋注（一）を参照。

されるように、詩禍への懸念や心配が他人に巻き添えになったためである。

②周文璞(?—1221)、字は晋仙、号は方泉、野齋と山楹である。周文璞の生年は不明だが、羅紅娟(2013)<sup>63</sup>によると、彼は南宋中後期に生活し、主に寧宗時代(1194—1224)に活躍した。周文璞は山東出身で、その祖先は靖康の乱のために故郷を離れ、両浙西路に住んでいた。彼は一生に二回官僚になった経験がある。一度は1195年ごろ溧陽県丞に就任し、後に讒言されて5年間冷遇を受けた。二回目は1207年に内府守蔵史と務めた。その後間もなく退官して隠居した。

程章燦によれば、『後村先生大全集』巻3「哭周晋仙」に、

長安酒樓上，猶記昔相尋。(長安の酒樓で会ったシーン、今も覚えている。)

という一節があり、劉克莊と周文璞は臨安のある酒樓で知り合ったことがわかる<sup>64</sup>。筆者は周文璞と劉克莊二人の生涯を考察して、1207年に二人はちょうど臨安にいるはずであり。ここの長安は臨安を指すと考えている<sup>65</sup>。また、張宏生(1995)は、この詩は嘉定十四年(1221)に詠まれたものであり、周文璞がこの時に亡くなったと推測している。筆者はこの詩をもとに二人の関係が親密であると推測している。しかし、今のところ彼らの交遊を証明する史料を見ることができていない。

周密『齊東野語』巻16「詩道否泰」の条には、周文璞も江湖詩禍の関係者であると記載される。張宏生(1992)によれば、周文璞は江湖詩禍が発生する前に既に死亡している。よって、江湖詩禍とは無関係であると考えている。筆者の見るところ、慶元詩禍の中で敖陶孫が他人の巻き添えになったことがある以上、周文璞が詩禍の関係者だと誤解されても不思議ではない。

以上の二人の詩人はいずれも劉克莊が早期に知り合った詩人である。向清(1987)では宝慶年間の「江湖詩禍」を分割線とし、江湖詩派を前後二期に分けた。敖陶孫と周文璞はいずれも詩禍の中や詩禍の前に亡くなったので、すべて前期の詩人である。後述するように裘万頃、趙師秀、趙庚夫、曾極のような江湖詩派にも前期の詩人が少なくない。劉克莊の交遊関係には江湖詩派の前後二期の詩人が含まれていることも明らかになった。

また、もう一つ興味深いことに、上述の二人の詩人敖陶孫と周文璞の事績には、臨安にある酒樓で展開された物語がある。文人士大夫、特に当時の太学生たちが、酒樓の間で連絡を取り合うのは普通のことだった。

<sup>63</sup> 羅紅娟「江湖詩人周文璞生平研究」(『文教資料』2013年第36期)を参照。

<sup>64</sup> 程章燦『劉克莊年譜』(貴州人民出版社、1993年)66頁を参照。

<sup>65</sup> 南宋時代の長安はすでに南宋の境内ではなく、ここは長安によって同じ都の臨安を指す。

d 詩社の社友グループ<sup>66</sup>

『後村先生大全集』巻 109「二戴詩巻」に、

余年甫三十一，同時社友如趙紫芝、仲白、翁靈舒、孫季蕃、高九萬皆與式之化爲飛仙。  
余雖後死，然無與共談舊事者矣。

（劉克莊は 31 歳である。同じ社友だった趙師秀（字は紫芝）、趙庚夫（字は仲白）、  
翁卷（字は靈舒）、孫季蕃、高九萬らは、戴復古（字は式之）とともに逝去している。  
私はまだ死んでいないが、昔のことを語り合う人はいなくなっている。）

とある。また、同巻 150「孫花翁」墓誌銘に、

初，季蕃與趙紫芝、仲白、曾景建、翁應叟諸人善，而余亦忝交遊。追念疇昔挽紫芝、  
季蕃同吟，銘仲白，季蕃書丹，誄孚若，季蕃會哭，已而景建、應叟俱死，今銘季蕃焉。

（最初は、孫季蕃と趙師秀（字は紫芝）、趙庚夫（字は仲白）、曾極（字は景建）、翁  
定（字は応叟）が親交であったが、私も彼と交遊をしていました。以前、趙師秀の  
挽詩を書く際に、孫季蕃と共に詩を詠むことがありました。私が趙庚夫の墓誌銘を書  
いた際には、孫季蕃がその書丹を墓碑に書き入れていたことを覚える。また、私が方  
信孺（字は孚若）を弔う際に時、孫季蕃が泣く姿を目にした。そして、曾極も翁定も  
この世を去った後、今では私が孫季蕃の墓誌銘を執筆する立場にある。）

と、劉克莊と翁卷・趙師秀・趙庚夫・高翥・孫惟信・曾極・戴復古らはかつて社友関係だ  
ったことがわかる。

①翁卷（1163 年から 1167 年の間に生まれ）、字は続古、あるいは靈舒である。「永嘉四  
靈」の一人だが、陳曉蘭（1999）<sup>67</sup>により、翁卷は永嘉四靈の中で唯一の両浙東路温州（永  
嘉とも称する）樂清県の人である。残り 3 人はすべて永嘉県の人で、二県は隣接してい  
る。陳増傑（2011）<sup>68</sup>によれば、翁卷の生年は隆興元年（1163）から乾道三年（1167）の  
間にあり、最も可能性が高いのは 1164 年である。没年は確定できないが、少なくとも 60  
歳までは生きている。

程章燦の劉克莊年譜によると、劉克莊は嘉定十六年（1223）八月に都に行って改秩し、  
翌年の 1224 年初めに臨安に到着してから帰郷した。この時に書かれた『後村先生大全集』  
巻 7「贈翁卷」に、

江湖不相見，纔見又西東。（世間で会わないが、会ったばかりなのにまた別れる。）  
という句がある<sup>69</sup>。この期間に二人は接触しており、以前から知り合いだったことが分か

<sup>66</sup> 詩社は詩人たちが定期的に詩文交流を行う組織で、一般的に規模が小さく、人数や地域が固定され  
ている。唐代と宋代に最も盛んに行われた。また詩社内部のメンバーは互いに「社友」と呼び合う。

<sup>67</sup> 陳曉蘭「翁卷生平及其詩集考述」（『北京大学古文献研究所叢刊』1999 年第 1 期）を参照。

<sup>68</sup> 陳増傑「永嘉四靈考論四題」（『温州大学学报（社会科学版）』2011 年第 3 期）を参照。

<sup>69</sup> 程章燦『劉克莊年譜』（貴州人民出版社、1993 年）80—85 頁を参照。

る。また、同巻 176「詩話」後集に、

然四靈中如翁靈舒乃不喜此作，人之所見者不可解如此者。

（永嘉四靈の中で、翁卷がこの作品を好まないと同時に、この詩文を見た人々が翁卷の考えを理解できない。）

とある。また、同巻 7「贈翁卷」に、

非止擅唐風，尤於選體工。有時千載事，祇在一聯中。

（翁卷は唐代の風格を涉獵するだけでなく、特に『文選』の体制を模倣することが得意である。世の中に存在するすべてのことは、彼の一句の詩文に記載されている。）

と、劉克莊は翁卷の詩風について一定の理解を持っており、互いの唱和は少なくないと推測される。このほか、同巻 98「曹東叟集」に、

永嘉多詩人，余及識紫芝、靈舒，公集中亦有與舒往還者，因併記之而奉巨編歸之司直使君。<sup>70</sup>

（永嘉は多数の詩人を輩出している。私（劉克莊）は趙師秀（字は紫芝）、翁卷（字は靈舒）を知るに至って、あなたの文集中にも翁卷との往来の詩文が存在するのを発見し、合わせて抄録した。この巨編の詩集を使者に渡すこととしている。）

とある。この史料からは、詩人間では互いに詩を複写して称賛し合うという交遊が行なわれたことがわかる。また、1225 年から 1228 年の間に書かれた同巻 8「永嘉黄九萬見訪」<sup>71</sup>に、

靈舒如見問，今作灌園翁。（翁卷があなたを通じて私に挨拶に来てくれた。彼は現在、隠居する高齢の老人であることを分かった。）

と、陳曉蘭（1999）は翁卷が 1228 年に 60 歳になり、故郷にいたと考察する。劉克莊は彼の故郷から訪れた永嘉詩人を經由して翁卷の近況を尋ねた。後述するが、胡仲弓と陳起は劉克莊が病気で療養している間も詩文を送って近況を訊ねた。親友の体調を問うことは江湖派詩人の交遊の中では珍しくないことが分かる。

②趙師秀（1170—1220）、字は紫芝、あるいは靈秀、号は天樂である。両浙東路瑞安府永嘉県の人。永嘉四靈に関する研究の中では、翁卷よりも多くの関心が集まっており、特に彼の生没年を考察する研究<sup>72</sup>が多い。

<sup>70</sup> この文は文中に字が欠けており、原文は「余及識紫芝，靈舒公集中亦有與「靈」舒往還者」とあるべきである。

<sup>71</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』（中華書局、2011 年）455 頁を参照。

<sup>72</sup> 葛兆光「趙師秀小考」（『文学遺産』1982 年第 1 期）、丁夏「趙師秀生年小考」（『文学遺産』1983 年第 4 期）、陳増傑「対「趙師秀小考」的幾点補正」（『文学遺産』1984 年第 3 期）、華岩「趙師秀卒年小議」（『文学遺産』1985 年第 1 期）、陳増傑「趙師秀考論三題」（『浙江社会科学』2010 年第 10 期）、陳増傑「永嘉四靈考論四題」（『温州大学学报（社会科学版）』2011 年第 3 期）などを参照。

劉克莊と趙師秀の二人の交遊関係については、いくつかの史料から間接的に見ることができる。上述の『後村先生大全集』巻 109「二戴詩卷」及び同巻 107「趙崇安詩卷」に、  
本朝全盛時、貴顯而負詩名者有德麟，近歲有南塘兄弟，詩工而命窮者有紫芝、仲白，  
而南塘遂爲一代騷人之宗。余少交芝、白，嘗接南塘議論，故江湖吟人亦或謂余能詩，  
顧詩豈易能哉！

（本朝全盛の時代には、高位を持ちながら世間に知れ渡っていた人物が趙令時（字は德麟）であった。近年においては、趙汝談（号は南塘）と趙汝讜という二人の兄弟がいた。詩を書くことに長けながら貧乏であった人物には、趙師秀（字は紫芝）、趙庚夫（字は仲白）が存在している。趙汝談（号は南塘）と趙汝讜の兄弟は既に一代の詩人の宗匠とされている。私（劉克莊）は若い頃に趙師秀、趙庚夫と交わり、二人はかつて趙汝談と趙汝讜兄弟と議論を交わした経験があるので、江湖の詩人は、詩を書くことができると彼らを称賛するようになった。詩を作るのはそんなに簡単ではないだろうか。）

とあり、二人の交遊関係も早くから結びついたことがわかる。しかし、二人が直接交流している証拠を見つけるのは難しい。

程章燦の劉克莊年譜によると、嘉定十四年（1221）に書かれた『後村先生大全集』巻 3「哭趙紫芝」という詩は、趙師秀が前年 1220 年に亡くなったことがわかる<sup>73</sup>。その後も劉克莊は他人に与えた詩文の中で趙師秀について頻繁に言及し、懐かしむことになるだろう。例えば『後村先生大全集』巻 3「答湯升伯因悼紫芝（湯千を感謝して、及び趙師秀を弔った）」という詩は劉克莊が嘉定十三年（1220）に帰郷した時、湯千（字は升伯）を見た時に書いたものである。また、同巻 32「竹溪痔後齒痛小詩問訊」に、

渴見紫芝常入夢，共游黃蘗屢愆期。

（趙師秀（字は紫芝）に会いたいという思いが強かったため、彼を夢によく見るようになった。彼と共に黄蘗で遊びたいが、何度も彼の約束を破ることになってしまった。とある。また、自分の「雜詠一百首」でも趙師秀を取り上げている。同巻 14「雜詠一百首」、四皓に、

去避坑焚禍，來成羽翼功。留侯不自語，驅使紫芝翁。

（詩禍のために本を燃やしていたが、現在ではその功績が高く評価されている。天下を補佐した功績は勿論のこと、趙師秀を駆使したこともその一環とである。）

とある。また、同巻 46「留侯一首」に、

一搥復九世讎，編書封萬戶侯。指視紫芝翁出，身從赤松子遊。

（一つの錘で九世の恨みを全て解決し、著作を編纂するだけでなく、万戸侯にも封じられた。指をさして趙師秀が現れたのを見て、体は神仙の赤松子と共に旅に出たとさ

<sup>73</sup> 程章燦『劉克莊年譜』（貴州人民出版社、1993 年）66 頁を参照。

れている。)

とある。劉克莊の趙師秀に対する感情の深さがうかがえる。

陳曉蘭(1999)の考察によると、嘉泰四年(1204)、永嘉四靈の徐照、徐玑、趙師秀の三人は西方へ遊行し、翁卷も両浙路から江南西路に入り、江西各地を漫遊した。翁卷は徐照の後に趙師秀と合流し、二人は信州、南昌などを遊歴して友を訪れた。その後、翁卷は再び江西省に赴き、臨川にて生活した。胡益民(1991)<sup>74</sup>の趙師秀の交遊研究では、交遊相手の江南西路出身の詩人が少なくないことが分かった。杜耒、張戈、趙汝錡、同じく趙師秀の親友である。上記の宋自遜の交遊考察から、劉克莊の臨安社友グループと江南西路の江湖派詩人との間には深いつながりがあることが分かった。

③趙庚夫(1173—1219)、字は仲白、魏王の八世孫である。福建路興化軍莆田県に寓居し、劉克莊と同里である。『後村先生大全集』巻148「趙仲白」墓誌銘に、

念昔與仲白遊二十年，嘗約歲晚入山讀書。

(劉克莊は以前から20年間に趙庚夫と交遊しており、年を取ってから一緒に山に入  
って学ぶことを約束したことがある。)

とあり、程章燦は慶元六年(1200)劉克莊が趙庚夫と交遊したと考えられている<sup>75</sup>。また、「趙仲白」墓誌銘に、

仲白性不妄交，與潘耒、趙師秀論詩，曾極論《參同契》，輒暗合。

(趙庚夫(字は仲白)は性格上の理由から無闇に交際をしない。潘耒、趙師秀とは詩  
について語り合い、曾極とは「參同契」について論じたことがあるが、個人的な考え  
は非常に一致している。)

とある。また、同巻10「題趙子固詩卷」に、

紫芝仲白俱仙去，晚秀唯君擅士林。

(趙師秀と趙庚夫が亡くなった。優れた後輩としてあなた(趙孟堅(字は子固))だ  
けが士大夫の間に立つ存在である。)

とある。同巻24「題趙西里詩卷二首」に、

紫芝仲白飛仙去，常恐英才不復生。

(趙師秀も趙庚夫も亡くなった。劉克莊は常に、英才が再度世に出ることはないこと  
を恐れていた。)

とある。また、上記の「二戴詩卷」では、趙師秀と趙庚夫と一緒に言及されていることが分かった。二人の関係の良いたことが窺える。劉克莊が趙師秀らと接触した時期は不明だが、趙庚夫が劉克莊と早い時期から接触している。趙師秀と同じ宗室趙氏一族であることを考

<sup>74</sup> 胡益民「趙師秀交遊考」(『文獻』1991年第2期)を参照。

<sup>75</sup> 程章燦『劉克莊年譜』(貴州人民出版社、1993年)12頁を参照。

慮すると、筆者は劉克莊がまず莆田県の趙庚夫と接触し、その後両浙東路の中心人物の趙師秀に接触し、他の両浙路の詩人に接触する可能性があると推測した。

趙庚夫の死は早かった。しかし劉克莊と同じ莆田県人であるため、より親密な関係にある。そして、考察できる史料も多く残っている。『後村先生大全集』巻1「送仲白」に、  
官舎蕭條葦蓋簷，拾薪獨有一長髯。同來社友因飢瘦，遠作參軍得俸廉。國士交情窮乃見，故人詩律晚方嚴。中年各要身強健，別後寒衣切記添。

（官舎は葦で軒を覆われ、老人が薪を拾って暖を取るに過ぎない。同じ社友の詩人はみな老いており、私は任官のために故郷を離れ、わずかな俸禄を得ることができる。朝廷にいる士大夫との交わりは困窮した時に限られており、故人の詩文の韻律は晩年になってようやく整っている。人は中年になるとそれぞれ体を丈夫にする必要があるが、別れてから寒くなったらもっと服を着くことを覚えるべきである。）

とある。劉克莊は間もなく赴任する趙庚夫を見送り、趙庚夫の生活状況と健康への懸念を示した。また、『詩家鼎脔』巻上に趙庚夫の「道中逢潜夫」に、

相逢投草舎，對雨話移時。衣濕全無火，囊空各有詩。客程樵可問，日課僕皆知。未別情先惡，那堪遠別離。

（出会いの後に、草舎に住むこととなり、雨が降るたびに話し合う短い時間の中で、服はすべて濡れておりながら、火がなく、囊中には金がなくとも、それぞれ詩集を所持している。その後、住居や旅路について互いに問い合わせを交わし、毎日に書かれたものは、召使いに至るまで理解されるようになった。まだ別れていないのに悲しみを感じる。そんな遠い別れに耐えられるものか。）

とある。いつ書いたのかは考察ではないが、二人は劣悪な状況の中でも、出会いの際に詩学討論に対する情熱を共有したことがうかがえる。

『後村先生大全集』巻96「山名別集」に、

始余請南塘選仲白詩，南塘更以屬余，苦辭不獲。（中略）又二十年，余益衰老，從時願求仲白遺藁熟復，（中略）初選余年三十三，再選六十八矣。

（最初に、私（劉克莊）は趙汝談（号は南塘）に趙庚夫（字は仲白）の詩を選んで掲載してほしいと依頼したが、趙汝談はこの件を私に委ねてくれた。私は趙庚夫の詩を発見することができなかったことに苦しんだ。（中略）また二十年後、私は益々老衰しつつあり、趙時願（趙庚夫の息子）から趙庚夫の遺稿を求めた。（中略）私は初めて趙庚夫の詩を選んだ時が三十三歳であり、再度詩を選んだ時にはすでに六十八歳であった。）

とある。程章燦の劉克莊年譜によると、劉克莊が三十三歳の時は1219年だった<sup>76</sup>。劉克莊が趙庚夫の墓碑銘を書いた時には、すでに詩集を編む意向があった。そして趙汝談に依

<sup>76</sup> 程章燦『劉克莊年譜』（貴州人民出版社、1993年）50頁を参照。

頼をしたが、断られたことが分かる。上述したように、1254年、劉克莊は68歳の時に文集を再編集した。そのきっかけは同巻156「雪觀居士」墓誌銘に、

顧夫人名靜華，自號雪觀居士，故國子博士杞、孺人林氏之女，山中趙君庚夫字仲白之妻，前國子監簿趙時願字志仁之母。（中略）志仁既采綸言，扁其冢舍曰「錫耀堂」，又泣謂余曰：「先母之窆僅書世系、卒葬年月日於坎，銘則未也，敢以請。」余亦泣曰：「夫人吾友之令妻，吾里之貞婦，吾先君、先太夫人之所視猶子者也，敢不敬諾！」（中略）余三十三而銘仲白，六十八而銘夫人。是歲志仁以奉議郎通守泉州，兼南外宗正丞。

（顧夫人の名は静華であり、自身は雪觀居士と号す。故国子博士の顧杞と林孺人の娘であり、趙庚夫（号は山中、字は仲白）の妻でもある。国子監簿趙時願（字は志仁）の母である。（中略）趙時願は皇帝から与えられた言葉の中に、「錫耀」という文字を用いて扁額を作り、喪中の自分の居場所を命名した。また、泣きながら私に「母の墓の中には、世系の系譜と亡くなって埋葬された年月日だけを書いた。墓誌銘はまだ書いていません。あなた様にお願いしに来ましたからです」と述べた。私も泣きながら、「顔夫人は私の友人の妻であり、ふるさとに貞婦として知られており、私の父と母が養子と見なしている人です。私は承知しないわけにはいかない」と述べた。（中略）私は三十三歳の時に趙庚夫の墓碑銘を書き、六十八歳で顔夫人の墓碑銘を書いた。その年趙時願は奉議郎通守泉州で南外宗正丞を兼任した。）

とある。劉克莊が68歳の時、趙庚夫の子趙時願は母の顔氏の墓に世系と生没年しか書かれておらず忍びないので、劉克莊に母の墓碑銘を依頼していることがわかる。そこで劉克莊はこの機会に趙時願に趙庚夫の旧稿を求め、『山名別集』を再編集した。そして、劉克莊の趙庚夫の詩文に対する賞賛を見ることができる。また、同巻4「華巖知客寮」に、

第四句亡友趙仲白所作，今補足之。

（第四の句は、故人である趙庚夫が記したものであり、現在はその補足を行う。）と自注されている。劉克莊は趙庚夫の文集を収集する際にも補充収集を行っていることがわかる。墓碑銘のほか、同巻2に「挽趙仲白二首」、「與客送仲白葬回登石室」などの詩がある。また、同巻3「過永福精舍有懷仲白」に、

永福招提小步廊，憶攜詩卷共追涼。年來行處常迂路，纔近君家即斷腸。一樹梅花掩舊居，主人仙去客來疎。白頭留得吟詩友，每見郎君勉讀書。

（永福の招提寺の小さな廊下において、昔共に詩卷を持ち、涼しさを求めて追及したことを思い出す。近年、様々な場所を訪れる際にこの地を通過し、あなた（趙庚夫）の家に近くにつれ、悲しみを感じ始めた。梅の木があなたの昔の住居を覆い、この屋の主人はすでに亡くなっている。お客さんも稀にこの場所を訪れる。私の若白髪には、まだ詩を詠む友人が数多くおり、あなたの子供を見るたびに、本を読むよう励ましを与えてくれる。）

とあり、劉克莊は趙庚夫の住所を知っており、劉克莊と同里の趙庚夫は住所の中で交流した可能性がある。『後村先生大全集』には劉克莊と趙庚夫の交遊が記録されているほか、現地での趙庚夫の影響も記録されている。同巻 91「山中祠堂」に、

宋諸王孫庚夫字仲白，嘉定間擅詩名，官卑齡促，士林惜之。端平乙未，太守廬陵楊侯夢信從衆請，祠之於城南青涼岐。（中略）時江湖吟者凋零略盡，仲白子時願屬予以記。

（宋氏諸王の孫である趙庚夫は、嘉定の年間（1208 年～1224 年）に詩名を高い。しかし、官位が低い上に任期も短いため、多くの人々が彼を惜しんだ。端平乙未年（1235 年）廬陵太守楊夢信は、多くの人々の要請に基づき、城南の青涼岐に趙庚夫を祀るための祠を建設した。（中略）現在の江湖詩人は多く残っていないが、趙庚夫の子である趙時願は、この祠のために私に記を書き下ろすよう依頼した。）

とある。同巻 21「山中祠堂」に、

端平聞說建斯堂，白首纔重一炷香。早有埋辭表真曜，晚爲畫贊頌東方。秋風浩蕩吹墳樹，落月依稀照棟梁。千古行人來下馬，陳詩不必奠椒漿。

（端平年間（1234 年～1236 年）にこの祠が建立されたと聞くにあたり、私が白頭になってからここに線香を捧げた。これまでの墓碑銘には、趙庚夫の偉大な功績が明記されており、その後も「画贊」（画像中の人物を讃えることを主旨とする文体）を書いて、太陽が昇る方向に向かって讃えられた。秋風が強く墓のそばの木々に吹き、月がまだちらちらと軒を照らす。古くから歩行者はここに馬を降りて祭ることに訪れ、詩文を捧げることで酒を供える必要はなかった。）

という詩がある。地元士大夫の趙庚夫の影響がうかがえる。

④高翥（1170—1241）、初名は公弼、字は九万、号は菊磻である。舜江の人だが、両浙東路紹興府余姚に寓居した。程章燦の劉克莊年譜によると、二人の交遊は 1225 年から 1234 年の間に集中していた<sup>77</sup>。

1230 年に劉克莊が江湖詩禍で故郷に戻った時、高翥は陳安を弔うために劉克莊の故郷を通過した際に訪れた。劉克莊は『後村先生大全集』巻 9「題高九萬菊磻」と「別高九萬」という二つの詩を贈った。高翥の『菊澗集』には、「潜夫約中途遣詩相送至江山無耗寄詩督之<sup>78</sup>」と「同劉潜夫登烏石山望海有懷方孚若柯東海陳復齋舊游<sup>79</sup>」の 2 首の詩がある。この二つの詩が読まれた年代は考証できないが、烏石山は劉克莊の旧居地にあり、「題高

<sup>77</sup> 程章燦『劉克莊年譜』（貴州人民出版社、1993 年）93—95、118—119、136、138 頁を参照。

<sup>78</sup> ここは「劉克莊と詩文を交わすことを約束したが、江山に到着しても劉克莊から手紙を受け取ることができなかったため、詩を送ることで彼を促す。」と訳す。

<sup>79</sup> ここは「劉克莊と共に烏石山に登り、海を望むことにした。これまで方信孺（字は孚若）、柯夢得（字は東海）、陳安（号は復齋）と共に旅をした光景を懐かしんでいた。」と訳す。

九萬菊磻」と「別高九萬」と同時に書かれている可能性が高い。

『後村先生大全集』巻10「和高九萬雪詩」に、

添盡綿衣體未和，小窗奈此苦寒何。極知上竺仙人喜，不道長安貧士多。窮巷都無晨噪鵲，邊城應有夜驚鵲。君才堪續《梁臺賦》，早晚樓船濟汴河。

（多くの綿入れを着用しているにもかかわらず、体が暖かく感じられないことについて、小さな窓が家をなぜここまで寒くするのか。上竺にいた仙人たちの喜ぶことを知っているだけで、長安にはまだ多くの貧しい人々がいるという事実は言及されていない。辺鄙で粗末な路地の朝には、鳥の鳴き声すら聞こえないことがあるが、辺境の町には夜に驚いたガチョウがいるという事実がある。梁台賦を書き続けたばかりであり、汴河の周辺における楼や船は朝から晩まで混雑している状況である。）

と、詩の中で臨安の景観を描いている。また、程章燦の年譜によると、この詩は1234年に書かれていた<sup>80</sup>。劉克莊は1234年九月に臨安に着いた。この時、両浙東路紹興府に住んでいる高翥と再会した可能性がある。それ以外、『後村先生大全集』巻8「贈高九萬并寄孫季蕃」の二に、

菊磻説花翁，飄蓬向浙中。無書上皇帝，有句惱天公。世事年年異，詩人箇箇窮。築臺并下榻，今豈乏英雄。

（高九萬と孫季蕃とは、各地を放浪し、浙中地域に辿り着いたとされている。皇帝に対して上奏する文書はなく、運命を悔やむ言葉は存在する。（朝廷に入って官職に就くことができず、自分の運命が悪いと嘲笑するしかない）。世の中には毎年新たな出来事が起こるが、詩人は常にそれぞれ困窮している。誰もが居間を建てて住むことができれば、今どこに英雄が欠けているのだろうか。）

と、詩の中で孫惟信に言及し、しかも高翥の『菊澗集』の「同劉潜夫登烏石山望海有懷方孚若柯東海陳復齋旧遊」の中で、方孚若は方信孺を指している。候体健（2015）<sup>81</sup>によると、方信孺は奉祠の期間中、身の回りに陳宓、柯夢得、趙庚夫、劉克莊、方左鉞、高翥、胡仲弓、胡仲參、林景祥、孫惟信、翁定などの詩人が集まると指摘する。高翥と孫惟信は方信孺との交友関係で知り合った可能性のあることがわかる。臨安の社友グループを除くと、劉克莊は高翥と孫惟信と同じ方信孺の交遊圏にいることも明らかになった。

⑤孫惟信（1179—1243）字は季蕃、号は花翁である。婺州人、原籍は開封である。張宏生（1995）の江湖詩派メンバーのリストには孫惟信はいないが、孫培（2023）と向以鮮（1995）いずれも孫惟信が江湖詩派の重要なメンバーと考えている。『後村先生大全集』

<sup>80</sup> 程章燦『劉克莊年譜』（貴州人民出版社、1993年）138頁を参照。

<sup>81</sup> 候体健「南宋祠祿官制与地域詩人群体：以福建為中心的考察」（『復旦學報（社会科学版）』2015年第3期）を参照。

卷 150「孫花翁」墓誌銘に、

季蕃長於詩，水心葉公所謂「千家錦機一手織，萬古戰場兩鋒直」者也。中遭詩禁，專以樂府行。

（孫惟信（字は季蕃）は詩を書くことに秀でおり、葉適（世間では水心先生と呼ばれる）に「一人で千軒の織機を織り出す職人も、千百年の戦場で鋭い刃のようなものであった」と高く評価されている人物である。中年に詩禁を経験し、その結果、樂府詩の創作を始めた。）

とあり、孫惟信が江湖詩禍の後に詞を専門としていることがわかる。また、同巻 2「送孫季蕃」に、

家在吳中處處移，的於何地結茅茨。

（孫季蕃は吳中地域を各地で移動しているが、一体いつになったら安定した住居を定めることができるのでしょうか。）

とあり、孫季蕃は典型的な遊走型詩人であることがわかる。

『後村先生大全集』巻 2 には孫惟信との唱和詩が複数ある。例えば「戲孫季蕃」、「同孫季蕃游浄居諸庵」、「送孫季蕃」、「月下聽孫季蕃吹笛」である。辛更儒の校注によると、巻 2 は 1219 年から 1220 年の間に書かれている<sup>82</sup>。その中の「同孫季蕃遊浄居諸庵」から、辛更儒は莆田県には「浄居」の名を冠した寺があると考証する<sup>83</sup>。二人は福建路莆田県の景勝地で交遊していることがわかる。また、同巻 25「余平生不至廬山六月廿八日夜夢同孫季蕃游焉林木參天瀑聲如雷山中物色良是一刹甚幽邃傍人告曰此有不出院僧余與季蕃欣然訪之語未終而覺將曉矣窗外簷溜淋浪紀以二詩<sup>84</sup>」という詩により、孫惟信が亡くなった後に、劉克莊は彼と一緒に景勝で遊ぶ夢がある。また、「月下聽孫季蕃吹笛」に、

孫郎痛飲橫長笛，玉樹胸襟鐵石顏。

（孫季蕃は酒を多量に飲んだり、フルートを吹いたり、少年の顔立ちは端正であるが、確固たる姿勢をしておる。）

とあり、二人は詩の交流のほか、一緒に景勝を遊覧し、酒を飲んで樂を楽しむことがわかる。

『後村先生大全集』巻 150「孫花翁」墓誌銘によると、孫惟信は 1243 年九月に亡くなった。それから数年、劉克莊は彼を懐かしむ詩を数編詠んでいる。例えば、巻 13「哭孫

<sup>82</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』（中華書局、2011 年）81 頁を参照。

<sup>83</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』（中華書局、2011 年）117 頁を参照。

<sup>84</sup> ここは「劉克莊は生まれてから廬山を訪れたことがなく、6 月 28 日の夜に、孫季蕃と共に廬山へ旅行する夢を見た。廬山の木々は天に届くほど高く、滝の音は雷のような大きさであった。山の景色は美しく、一瞬にして非常に静かであった。隣の人に「お寺に出ない僧がいる」と教えられたので、私と孫季蕃は彼を訪ねようと喜んでた。しかし、話が終わる前に目覚めた。夜が明けたばかりであり、窓の軒先に雨が降っていることに気づいた。そのため、記念として 2 首の詩を書くこととなった。」と訳す。

季蕃二首」、卷 17「梅花十絶、答石塘二林」二疊の十、卷 23「夜檢故書、得孫季蕃詞、有懷其人二首」、卷 33「七十八吟六言十首」その六、卷 34「自題長短句後」、卷 35「病中雜興五言十首」その八、卷 187「沁園春」などがある。面白いのは、他の社友を懐かしむ方法とは異なり、劉克莊の文には一部の詞がある。また、同卷 106「黃孝邁長短句」と同卷 111「湯埜孫長短句又四六」はいずれも孫惟信の詞に言及している。

『後村先生大全集』卷 150「孫花翁」墓誌銘に、

尤重氣義，嘗客孟良甫、方孚若家，孟死，猶拳拳其子孫，孚若葬，徒步赴義。（中略）追念疇昔挽紫芝，季蕃同吟，銘仲白，季蕃書丹，誅孚若，季蕃會哭，已而景建、應叟俱死，今銘季蕃焉。

（孫季蕃は特に義理人情を重んじており、かつて孟猷（字は良甫）、方信孺（字は孚若）の門客であった。孟猷が逝去した後、孫季蕃は彼の子孫を励まして育てた。また、方信孺が埋葬された際に、孫季蕃は徒歩で弔問に赴いた。（中略）以前、趙師秀の挽詩を書く際に、孫季蕃と共に詩を詠むことがありました。私が趙庚夫の墓誌銘を書いた際には、孫季蕃がその書丹を墓碑に書き入れていたことを覚える。また、私が方信孺（字は孚若）を弔う際に時、孫季蕃が泣く姿を目にした。そして、曾極も翁定もこの世を去った後、今では私が孫季蕃の墓誌銘を執筆する立場にある。）

と記されているが、上述の通り、孫惟信が方信孺の門客だったことがわかる。劉克莊と孫惟信の関係が維持できるのも、劉克莊と孫惟信が二つのグループの中において、交流が多いからだ。

⑥曾極（1168・1169—1227・1228）、字は景建である。江南西路撫州臨川の人。劉克莊、上述の敖陶孫、そして後述する陳起とともに江湖詩禍に巻き込まれた。『後村先生大全集』卷 101「宋自達梅谷序」に、

按寶慶丁亥，景建以詩禍謫春陵，不以其身南行萬里爲戚，方且倦倦然憂宋君營栖之無力，尤可悲也。余厚宋之諸昆，亦厚景建，感今念昔，覽卷慨然。

（宝慶丁亥年（1227 年）において、曾極（字は景建）は詩禍が原因で春陵へと左遷されたが、彼は自ら一人で万里を南行したことを悲しまず、むしろ宋自達の生計問題を懸念していた。特にその点が悲しく思われた。私は宋氏一族と親しかったし、曾極とも仲が良かった。現在では昔のことを偲び、彼の詩集を読みながら感嘆している。）とある。曾極は批判を受けて死んだことを知り、同じ江南西路の宋氏兄弟を忘れなかった。劉克莊と曾極と宋氏兄弟の間にもいくつかのつながりがあることがわかる。かつては兩浙路と江南西路江湖派詩人たちとの架け橋でもあった可能性が高いと推測する。

同卷 180「詩話」續集に、

李雁湖詩，程滄洲守宜春，刊於郡齋。余不及識公，初筮豫章，公謫居臨川，從曾極景

建得余詩。

（程公許（号は滄州）が宜春県知縣を務めていた際、彼は李壁（号は雁湖）の詩を郡齋において刊行された。私がまだあなた様（李壁）を知らなかった当時、私は靖安主簿に就任し、初めからあなた様は臨川縣に居住しており、曾極から私の詩集を手に入れたとされている。）

とある。程章燦の劉克莊年譜により、李壁が曾極から劉克莊の詩を手に入れたことがわかり、劉克莊と曾極の二人は 1210 年に詩文交流があったことが分かった<sup>85</sup>。また、同巻 1「舟中寄景建」に、

低蓬小雨夢殘時，忽憶同尋楚老祠。夜過豐城占斗氣，想公別後有新詩。

（夢の半ばで目覚めると、低い家の軒先に小雨が降っている光景が広がっていた。その時、突然、私たちが一緒に楚老祠を探していた頃のことを思い出した。夜に豊城を通りながら、鬬氣（星宿の名）の位置も探していたことを思い出し、あなたとはぐれた後、新たな詩ができたと思われる。）

と、辛更儒の校注により、「楚老祠」は「孺子祠」であり、同巻 1 に「孺子祠」という詩がある<sup>86</sup>。孺子祠は豫章に位置して<sup>87</sup>、二人はここで一緒に旅行していたことがわかる。程章燦の劉克莊年譜によると、劉克莊はこれまで嘉泰元年（1201）だけが江南西路撫州臨川縣に行ったことがあり<sup>88</sup>、二人は 1201 年に知り合った可能性がある。このほか、同巻 3 には「得曾景建書」、程章燦によれば、これは嘉定十四年（1221）春に書かれたものである。劉克莊は冬に桂林へ行って、臨川を通過した時に曾極と面会した<sup>89</sup>。それを示すのが、同巻 5 の「曾景建自臨川送予至豐城，示詩爲別、次韻一首<sup>90</sup>」という史料である。

以上、戴復古を除いて、筆者は社友グループの交遊関係を整理した。一部の社友は具体的な交際期間を特定するのが難しいが、全体的に推測すると、この社友グループの詩人は劉克莊と早くから知り合った。特に同じ福建路莆田縣の趙庚夫と江南西路撫州臨川縣の曾極が最も早い。その中で、高翥と孫惟信と劉克莊の交遊活動は莆田縣に集中している。詩文交流のほか、社友たちはしばしば景勝を訪れ、酒を飲んで音楽を演奏する。社友と呼ぶが、共通の唱和活動はあまり見られず、普遍的な意味で伝統的な文人士大夫の結社組織の形もない。しかし、劉克莊の文集には社友を懐かしむ詩文が多く、社友の詩文に対する評

<sup>85</sup> 程章燦『劉克莊年譜』（貴州人民出版社、1993 年）26 頁を参照。

<sup>86</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』（中華書局、2011 年）73 頁、箋注（二）を参照。

<sup>87</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』（中華書局、2011 年）63 頁、箋注（一）を参照。

<sup>88</sup> 程章燦『劉克莊年譜』（貴州人民出版社、1993 年）12—13 頁を参照。

<sup>89</sup> 程章燦『劉克莊年譜』（貴州人民出版社、1993 年）64 頁を参照。

<sup>90</sup> ここは「曾極は臨川から私を豊城に送り、別れの詩として贈与されたことがある。私もその詩の韻で踏襲して詩を創作した。」と訳す。

価も少なくなく、互いの間になじみがあることがわかる。

また、詩人たちの生卒年から見ると、劉克莊と孫惟信は後輩で、他の詩人の年齢が大体同じである。その中で趙師秀と趙庚夫が早世したため、このグループの持続時間はそれほど長くなかったと推測される。『後村先生大全集』149「孫花翁墓誌銘」からもわかるように、劉克莊は趙師秀らと深く交友しており、孫惟信を交遊することができることがわかる。先輩が手を取り合うことで後輩同士が知り合いになったような気がする。また、同巻108「方元吉詩」に、

每一篇出、仲白、李蕃輩皆驚異、水心、南塘二老各待以小友。余嘗志其墓。

（それぞれの詩文が発表されると、趙庚夫と李蕃らは驚いた。葉適（号は水心）と南塘兄弟（趙汝談、趙汝讜）はそれぞれ彼を「小友」と称し、扱った。また、私も彼の墓誌銘を作成したことがある。）

とあり、詩文で結ばれた「忘年交」が少なくないことがわかる。

候体健（2015）によれば、趙庚夫、高翥、孫惟信は劉克莊と同じく方信孺の交友圏に属する。また、劉克莊は方信孺が亡くなった後、莆田県に劉克莊を中心にまた非常に規模の大きな莆田地域の詩人グループを形成し、その主要メンバーは林希逸、劉希仁、李丑父などの詩人だと考えている。ある数人の詩人を中心に、繰り広げられている緩やかな交遊パターンは南宋ではよく見られる存在かもしれない。

#### e 宗室詩人たち

江湖詩派には趙氏の宗室詩人という特殊なグループが存在する<sup>91</sup>。全部で13人、そのうち3人の趙師秀・趙庚夫・趙汝讜は劉克莊と交遊している。上文では趙師秀と趙庚夫について検討したが、以下では趙汝讜に注目する。

趙汝讜（1172—1246）、字は明翁、号は野谷である。江南西路袁州の人。宋太宗八世の孫である。劉克莊と趙氏宗室詩人は、早くから知遇を得ていた。『後村先生大全集』巻152「刑部趙郎中」墓誌銘に「公四十年故友也」と、同巻94「野谷集」に「余幼交明翁，白首始見其詩（劉克莊は幼い頃から趙汝讜（字は明翁）と交遊しておるが、年老いて初めて彼の詩文を見た。）」と、劉克莊と趙汝讜の知り合いも早いことがわかる。そして向以鮮は「刑部趙郎中」墓誌銘に、

始余以檄留臨川，後以使事至番禺，於公行事得之聞見。

（劉克莊は当初、父と共に臨川県に赴き、その後広東提挙となった際に番禺に赴き、あなたの仕事している場所で会った。）

とある。二人は嘉泰三年（1203）に知り合ったと考証した。二人は嘉熙年間（1237—1240）

<sup>91</sup> 宋代の皇帝の苗字は趙であるため、皇帝の親族には江湖派詩人が存在した。これらの人々を宗室詩人と定義する。

まで、劉克莊が広東提挙に就任した時に趙汝鏐と再び交流した。交流は詩稿の送付や跋文の依頼が多い。その成果は同巻 94「野谷集序」及び巻 100「趙明翁詩藁」を参照にある。二編の執筆時間についても、後者の「趙明翁詩藁」に、

嘉熙戊戌，余嘗爲明翁序詩，後四年，明翁更示近作，乃錄集中警句於後。

（嘉熙戊戌年（1238 年）、私はかつて趙汝鏐の詩集の序を執筆した。四年後、趙汝鏐はまた近作の詩を私に見せた。そして、私はその詩集に優れた文を後ろに収録した。）とわかる。前者の「野谷集序」は 1238 年、後者の「趙明翁詩稿」は 1242 年に書かれていることがわかる。また、「刑部趙郎中」墓誌銘に、

淳祐丙午六月辛丑，永嘉太守趙公以疾卒於州治，喪歸袁之里第。戊申三月己酉，葬於宜春縣修仁鄉長豐山之原。諸孤奉《家傳》使來致治命曰：「必以後村銘我。」乃敘而銘之。（中略）余大病起，視筆硯如仇，聞公葬，作而曰：公四十年故友也，銘公非余而誰？

（淳祐丙午年（1246 年）六月辛丑日（14 日）、永嘉太守である趙汝鏐は病気のため官府で逝去し、袁州の旧居に帰り、戊申年（1248 年）三月に宜春県修仁郷長豐山の原野に葬られた。彼の子供たちは父兄と先祖の事跡の伝記を持って使者を派遣し、趙汝鏐の生前の遺言に基づいて私に告げた。「（趙汝鏐は）劉克莊に私の墓誌銘を書かせなければならない」とある。私はこのことを記し、彼の墓誌銘を書いた。（中略）私は大病を患い、筆墨紙すずりを視るのも退屈である。あなたが埋葬されたことを聞いて、詩を作った。「私とあなたは 40 年の旧友であり、趙汝鏐に墓誌銘を書く資格のある者は私以外に誰がいるものか？」と記した。）

とある。そして墓碑銘の中における趙汝鏐の生涯に対する総括からは、二人の関係が深いことがわかる。

興味深いことに、劉克莊と接触した趙氏三人はちょうど三つの異なる出身地に位置し、趙師秀は浙江東路瑞安府永嘉県の人で、趙庚夫は劉克莊と同じ出身地、福建路興化軍莆田県の人、趙汝鏐は江南西路袁州の人である。そして 13 人の宗室詩人たちで、筆者の見た限りでは、三人はその中で影響力が大きい。劉克莊と知り合ったのは早い。そして、趙師秀と趙庚夫と劉克莊は同じ社友であったことが分かった。趙汝鏐『野谷詩集』巻 4 に「秋日同王顥父、趙子野、何莊叟汎湖，趙紫芝繼至<sup>92</sup>」という詩がある。趙汝鏐、趙師秀の間には少なくとも交遊関係があることがわかる。楊理論、駱曉倩（2012）<sup>93</sup>の一文でこの 13

<sup>92</sup> ここは「秋の日に、王顥父、趙汝淳（字は子野）、何莊叟と共に湖を観光した。その後、趙師秀（字は紫芝）が遅れて合流した。」と訳す。

<sup>93</sup> その一文では、趙汝淳（張宏生（1995）によれば、趙汝淳の号は静斎である）も劉克莊と交遊していることに言及しているため、『後村先生大全集』巻 111「趙静斎詩稿後叙」と巻 110「趙卿遺稿」が二人の交遊の証拠だと考えている。筆者は前述の 2 つの史料と同巻 109「松山趙氏義莊規約」、巻 111「建徳県救済本末」と巻 155「安撫殿撰趙公墓誌銘」を共に考察した。この 5 つの史料に記述されてい

人の宗室詩人は、生活の年代は近いが、お互いの付き合いは少ないと考えている。また、劉克莊は宗室詩人との絆となったと考えている。しかし、この趙氏三人の関係から言えば、やはり何らかのつながりがあったはずだ。また、楊理論、駱曉倩（2012）の一文には、宗室詩人にはいくつかの共通の特徴がある。彼ら自身の宗室後継者の身分に対するアイデンティティであり、北方の回復に強い意識を持ったことがある。そして行謁行為に対する反感があるため、彼らの詩文に謁客詩はほとんど存在しない。

## （2）地方官時期の交遊関係

劉克莊は1209年初めに靖安主簿に仕え、嘉定十六年（1223）八月に都へ改秩してから、選人身分から昇進した。しかし、その後間もなく宝慶年間（1225—1227）の江湖詩禍となった。朝廷に入っても朝官を務める期間が短いことが多い。淳祐十一年（1251）になってやっと少し長く滞在できるようになった。これまでは祠禄官として福建路に赴き、地方官僚として各地をさまよっていた。この段階には彼にも多くの新しい江湖詩派の親友がいるが、関係は昔の友人ほど密接ではない。

### a 幕友関係の詩人<sup>94</sup>

裘万頃（?—1219）、字は元量、号は竹斎である。江南西路隆興府隆興県の人。劉克莊と幕友関係にある。『後村先生大全集』巻101「裘元量司直詩」に、

辛未、壬申間、予仕南昌，獲交二李君：國錄字茂欽，後以死守蘄州者；司直字敬子，世所謂宏齋先生者。裘君字元量，繼來幕府，（中略）後三十六年，其猶子南康理椽應材攜竹齋遺墨古律詩三首，又其季元齡手錄四十二首示余。

（嘉定辛未年（1211年）から嘉定壬申年（1212年）までの間に、私（劉克莊）は靖安主簿として務め、李という苗字を持つ2人の先生と知り合いを結んだ。李国録、字は茂欽で、後に蘄州を死守した人物である。また、李司直、字は敬子で、世に宏齋先生と称えられた人物である。裘万頃、字は元量である。彼はその後、靖安の幕府に就職し、私と知り合いを結んだ。（中略）三十六年後、彼の養子である南康の理椽（司理参軍）である裘應材は、裘万頃（号は竹斎）の遺稿である古律詩三首を持ち、彼の弟である裘元齡はまた四十二首の詩を写し、私に贈った。）

とあり、嘉定四年（1211）から嘉定五年（1212）の間、劉克莊は靖安主簿を務める。当時の同幕の裘万頃と知り合いだったことがわかる。向以鮮によって、同巻6の「哭裘元量司

---

る事件とその時間が合致していると考えている。辛更儒の校注により、巻110「趙卿遺稿」の趙卿が趙希澗であり、同巻155「安撫殿撰趙公墓志銘」を彼の墓志銘としたと考証する。そこで、『後村先生大全集』巻111「趙静齋詩稿後叙」と巻110「趙卿遺稿」は劉克莊が趙汝淳のために書いたものではなく、趙希澗との交遊史料だと考えている。

<sup>94</sup> 幕友関係とは、同じ官庁あるいは近い地域に仕事をする幕僚や官僚の間の関係を指す。

直」は 1239 年に作られ、裘万頃はこの時に死亡したと指摘されている<sup>95</sup>。その後 1246 年、裘万頃の甥の裘応材がその詩を携えて、劉克莊に訪ねてきて初めて「跋裘元量司直詩」があった。それ以外の二人の交遊記録は存在しない。彼らが親密ではないことが明らかである。

## b 遊走型の詩人

戴復古 (1168—1247) 字は式之、号は石屏である。両浙東路台州黄岩県の人。典型的な遊走型江湖派詩人 (科挙と官僚となることを放棄して、あちこち旅行したり、行謁する詩人を指す) である戴復古に対する学界の注目度は劉克莊にも匹敵する。吳茂雲 (2018)<sup>96</sup>によれば、研究の多くは文学面に集中している。その中で生没年と出身地の考察には池太寧 (2003) と張繼定 (2003・2017)<sup>97</sup>があり、その家族史の研究<sup>98</sup>で最も早く著名な研究は吳茂雲 (1987) である。その交遊関係を考察したのは陳宇 (2015)、胡伝志 (2017)、張繼定 (2003・2017)<sup>99</sup>である。

上述の通り、二人は社友だが、劉克莊と戴復古の関係は親密ではない。戴復古は長い間遊走していて、二人間の付き合いは少なくであった可能性がある。また、戴復古が亡くなった後に、劉克莊は挽詩や祭文は一切書かなかった。筆者は、戴復古が亡くなった時、劉克莊が弟の劉克遜と母の林氏の死の悲しみに陥っていたので、他人を顧みる暇がないと推測している。

『後村先生大全集』卷 109「二戴詩卷」に、

余爲儀真郡掾，始識戴石屏式之，後佐金陵閫幕，再見之。及歸田裡，式之來入閩，又見之。皆辱贈詩。(劉克莊は真州録事參軍を務める時、戴復古 (字は式の、号は石屏)

<sup>95</sup> 向以鮮『超越江湖的詩人一後村研究』(巴蜀書社、1995 年) 116—117 頁を参照。

<sup>96</sup> 吳茂雲「南宋詩人戴復古研究綜述」(『台州学院学報』2018 年第 1 期) を参照。

<sup>97</sup> 池太寧「戴復古的生平与創作」(『台州学院学報』2003 年第 2 期)、張繼定「戴復古生卒年考弁」(『文献』2003 年第 1 期)、張繼定「戴復古籍貫問題再考弁」(『江蘇師範大学学報』2017 年第 6 期) などを参照。

<sup>98</sup> 吳茂雲「戴復古家世考」(『成都大学学報』1987 年第 4 期)、吳茂雲「新出土戴氏家族墓誌与戴復古家世新考」(『台州学院学報』2011 年第 2 期)、何方「南宋台州戴氏家族詩歌創作及承伝」(『台州学院学報』2012 年第 2 期)、吳茂雲「新発見『戴氏家乘』中戴復古家世和生卒年」(『台州学院学報』2013 年第 2 期)、張経洪「詩礼望族：南塘戴氏家族文化的生成与伝統」(『武陵学刊』2018 年第 6 期) などを参照。

<sup>99</sup> 張繼定「石屏詩編選者及序跋作者考述 (上) —戴復古交遊考之一」(『浙江師範大学学報 (社会科学版)』2003 年第 6 期)、陳宇「論『詩家鼎鑪』与戴復古及江湖詩派之關係」(『中国韻文学刊』2015 年第 2 期)、胡伝志「戴復古与徐似道交遊略考」(『中国詩学研究』2017 年第 2 期)、張繼定「石屏詩編選者及序跋作者考述 (下) —戴復古交遊考之二」(『浙江師範大学学報 (社会科学版)』2017 年第 5 期)、呂肖奥「『江湖吟社』与南宋後期江西詩壇」(『江西社会科学』2018 年第 2 期)、費君清、樓培「戴復古真的「口不談世事」嗎？」(『浙江学刊』2021 年第 6 期)、張繼定「戴復古江湖出遊三回說」商兌」(『浙江師範大学学報』2023 年第 4 期) などを参照。

と知り合いを結んだ。その後、李钰の金陵幕府に入った際に、戴復古と再び出会う機会を得た。また、故郷に帰るにあたり、戴復古が福建に来た際にも彼に会うことができた。その度に、詩集を贈与し合った。）

とある。向以鮮（1995）によれば、劉克莊は戴復古と三回会ったことがある。第一回目は嘉定十年（1217 年）、劉克莊が 31 歳で儀真掾を務めた時に知り合った。二度目は嘉定十一年（1218 年）二月に劉克莊が李钰の金陵幕府に入った時である<sup>100</sup>。張継定（2017）により、『石屏詩集』巻 4「寄劉潜夫」もこの時に書いたと考えている。三回目の時間について、張継定（2017）により、紹定三年（1230）戴復古は福建路にあり、まず劉克莊の弟、古田県知県の劉克遜を訪れてから劉克莊を訪ねたことが分かる。呂肖奥（2018）も戴復古が紹定二年（1229）に古田県、莆田県一帯に滞在したと考えている。1227 年の江湖詩禍を回避したのかもしれない。その間に劉克莊を訪れたことがある。また、『後村先生大全集』巻 9 には「送戴復古謁陳延平」があり、辛更儒の校注によるとこれは 1228 年から 1232 年の間に書かれていたものである<sup>101</sup>。三度目の二人の出会いは 1230 年前後だったことがわかる。

その後、戴復古『石屏詩集』巻六「寄後村劉潜夫」その三に、

客游仙裡見君時，擁絮庵中共說詩。別後故人知我否，年幾八十病支離。

（私（戴復古）があなた（劉克莊）の故郷を訪れた際には、あなたと出会い、厚い服を着て家の中で詩文に関する議論を行った。別れの後も、あなたはまだ私を覚えていますか。私は既に 80 歳近くになり、体が弱く、病弱である。）

とある。戴復古の生年は 1168 年、没時 1247 年は 79 歳で、最後の一文は自分がそろそろ 80 歳になることを指すので、これは戴復古が亡くなる前に書いたものである。これによって、劉克莊と戴復古は 1247 年前後も交遊していることがわかる。しかし、1230 年から 1247 年の間に交流の頻度は不明である。

### c 臨安で交遊した福建詩人

胡仲弓（生没年不明）、字は希聖、号は葦航である。福建路泉州清源県の人。胡仲参の兄で、胡氏兄弟は同じ江湖派詩人だった。典型的な遊走型詩人でもある。

『後村先生大全集』巻 22 に「余辛卯歲卧病郡城陳宗之胡希聖有詩問訊後五歲希聖寄新刊漫遊集前詩已載集中次韻二首<sup>102</sup>」がある。また、胡仲弓の『葦航漫遊稿』巻 1 には「次

<sup>100</sup> 向以鮮『超越江湖の詩人—後村研究』（巴蜀書社、1995 年）31—32 頁を参照。

<sup>101</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』（中華書局、2011 年）505 頁を参照。

<sup>102</sup> ここは「劉克莊は紹定辛卯年（1231 年）が莆田県城にて病に倒れ、陳起（字は宗之）と胡仲弓（字は希聖）が詩文を送って彼の病状を尋ねた。五年後（1236 年）、胡仲弓が新刊『漫遊集』を彼に送った。前述の彼らが送った詩は既に彼の文集『漫遊集』に収められているため、劉克莊は彼の詩の韻に従い、2 首の詩を書き下ろした。」と訳す。

陳芸居問訊後村韻」と「後村來書有此心如珠有物蒙雲之之語芸居有詩再用前韻」もこのことを考証することができる。従って、1231年に劉克莊が病気にかかった時、陳起と胡仲弓の間に小さな唱和圈があったと推測される。前述した侯体健（2015）によれば、胡仲弓と劉克莊は同じ方信儒の交遊圈に属している。筆者は胡仲弓と劉克莊は1231年前にすでに認識していた可能性があると推測した。

また、胡仲弓『葦航漫遊稿』巻4には「讀後村梅花百詠」がある。『後村先生大全集』巻17「梅花十絶、答石塘二林」は1246年から1250年にかけて書かれたことがわかり、当時この「梅花百詠」の唱和活動は福建路で大きな影響を与えた<sup>103</sup>。胡仲弓は今回の唱和活動で唯一の江湖派詩人である。

その後、『後村先生大全集』巻22「辛亥去國陳宗之胡希聖送行避謗不敢見希聖贈二詩亦不敢答乙卯追和其韵<sup>104</sup>」から、1251年、劉克莊が弾劾されて臨安を離れた時、陳起と胡仲弓が見送りに来たことが分かった。胡仲弓『葦航漫遊稿』巻2「送後村去國二首」があることも証明できる。二人の交遊は1231年から1255年まで続いていた可能性がある。

このほか、胡仲弓『葦航漫遊稿』には、巻2の「悟枯崖將過莆城參訪後村書此贈行<sup>105</sup>」、「王用和歸從莆水寄呈後村<sup>106</sup>」という詩がある。劉克莊の自制した返信に比べて、胡仲弓は交遊の中でより積極的に見える。劉克莊との交遊からは、福建路を除いて臨安でも交遊していることが分かった。

#### d 臨安書坊と南岳稿の影響

陳起（生没年不明）、字は宗之、号は芸居である。張宏生（1989）により、陳起は宝祐四年と宝祐五年の間（1256—1257）までに生まれている。陳起は兩浙西路臨安府錢塘県の人。臨安睦親坊に書坊を経営していて、唐代、宋代以来の詩を刊行する<sup>107</sup>。『江湖集』を刊行したことで罪を犯し、江湖詩禍の関係者となった。江湖詩派における陳起の特殊な地位のため、その研究は少なくない<sup>108</sup>。その交遊関係に関する研究は張宏生（1989）及び

<sup>103</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』（中華書局、2011年）965頁を参照。

<sup>104</sup> ここは「劉克莊は淳祐辛亥年（1251年）に都を離れる際に、陳起と胡仲弓が見送りをくれた。詩禍が彼らに関わることを避けるため、彼らとは会うことのできなかった状況になった。胡仲弓は私に詩を2首お渡ししてくれたが、私はその返事ができなかった。宝祐乙卯年（1255年）に至り、初めて韻を従って唱和することができた。」と訳す。

<sup>105</sup> ここは「釈円悟（号は枯崖）は莆田県城を経て、劉克莊を訪ねようので、私（胡仲弓）はこの詩を書いて彼を見送りました。」と訳す。

<sup>106</sup> ここは「王用和が帰ってきたときに莆田の川を経由して、私（胡仲弓）はこの手紙を劉克莊に送りました。」と訳す。

<sup>107</sup> 裴苒迪、雒健晴、繆亜敏「臨安陳氏坊刻書目考略及特色分析」（『中国出版史研究』2015年第2期）を参照。

<sup>108</sup> 張宏生「〈江湖集〉編者陳起交遊考」（『文献』1989年第4期）、胡益民「陳起交遊統考」（『文献』1989年第2期）、胡益民、周月亮「江湖集編者陳起交遊統考」（『文献』1991年第1期）、馮敏「陳起研

胡益民（1989）、周月亮（1991）がある。

胡仲弓と同様に、二人の交遊記録が劉克莊の文集に残されたものは多くない。前述の劉克莊と胡仲弓の交遊から見れば、陳起は劉克莊と共に宝慶三年（1227）に発生した江湖詩禍の渦中にあり、災いを避けるためなどの理由で返信が少ないと推測できる。

陳起と胡仲弓が劉克莊の病状について見舞うことがあった。向以鮮（1995）により、『後村先生大全集』巻7「贈陳起」は1224年に書かれており、二人は嘉定十七年（1224）に交遊していたことがわかる<sup>109</sup>。陳起と劉克莊の交遊はこの年の詩集の収集と刊行から始まる。このほか、『江湖小集』巻28、陳起『芸居乙稿』の「史記送後村劉秘監兼致欲見之悰」に、

憶昔西湖濱，別語請教條。囑以馬遷史，文貴細字彫。名言猶在耳，堤柳凡幾凋。茲焉得蜀刻，持贈踐久要。會晤知何時，霽色審來朝。

（西湖湖畔にいたことを思い出し、別れを惜しむ時、私（陳起）はあなた（劉克莊）に一つの請求を申し上げた。それは司馬遷著『史記』を求めるという願望であり、その本は細字で刻まれており、非常に価値が高いとされている。あなたが述べられた言葉は今も耳に残り、堤防そばの柳が何度も散る様子は、歳月が経つことを物語っている。今回、蜀刻版の本を手に入れ、あなたはそれを持って私に餞別のために送ってくれた。私たちは再会の時期がまだ決まっていないが、晴れた日にあなたはまた都に戻ってくるのではないかとと思われる。）

とあり、陳起は江湖派詩人たちに詩の原稿を受け取ったりするほか、貴重な本を探すのも依頼していることがわかる。

程章燦の劉克莊年譜によれば、『後村先生大全集』巻194「宋修史侍讀工部尚書龍圖閣學士正議大夫致仕莆田縣開國伯食邑九百戶贈銀青光祿大夫後村先生劉公行狀」に、

公歸自桂林，迂道見南塘於三山，讀公《南嶽藁》，稱賞不已，自此遂爲文字交。

（劉克莊は桂林を離れ、故郷に向かう途中で、三山を通過する道で趙汝談と出会った。

趙汝談は劉克莊の『南岳稿』を読んだ後、その文才を感銘し、それから二人は文学を通じて友になった。）

とあり、劉克莊が桂林を離れたのは1222年の冬で、途中趙汝談に会った時、南岳稿がすでに刊行されたことが分かった<sup>110</sup>。程章燦の劉克莊年譜によれば、1223年8月に劉克莊は都へ改秩に行く。1224年に臨安で初めて陳起を知り、南岳の原稿を陳起に渡して再び刊行した<sup>111</sup>。南岳稿の刊行は劉克莊の詩壇での名声を急速に高めた。葉適『水心文集』巻

---

究」（国家図書館博士論文庫、2003年）、李厚瓊「南宋出版家陳起的詩性人生」（『内江師範学院学報』2017年第5期）などを参照。

<sup>109</sup> 向以鮮『超越江湖の詩人—後村研究』（巴蜀書社、1995年）119頁を参照。

<sup>110</sup> 程章燦『劉克莊年譜』（貴州人民出版社、1993年）74—75頁を参照。

<sup>111</sup> 程章燦『劉克莊年譜』（貴州人民出版社、1993年）84頁を参照。

29「題劉潛夫南嶽詩藁」に、

今四靈喪其三矣，家鉅淪沒，紛唱迭吟，無復第敘。而潛夫思益新，句愈工，涉歷老練，布置闊遠，建大將旗鼓，非子孰當。

（永嘉四靈の三人が亡くなり、永嘉学派は没落しているが、多くの詩文が創作されているが、しかしながら、永嘉学派を継ぐ人物は存在しない。しれども、劉克莊の詩学は革新的であり、詩文の語句はますます精巧である。経験が豊富であり、詩句の境地が広がっている。詩壇の旗を掲げる人は、彼に他ならない。）

とあり、葉適はすでに劉克莊を永嘉四靈の後継者としていることがわかる。上述の葉適が趙汝談の褒賞を除いて、南岳稿は江湖派の詩人の中にも少なくない評価がある。

程章燦の劉克莊年譜によれば、嘉定十六年（1223）に書いた『後村先生大全集』巻180「詩話」續集に、

癸未、甲申、余自桂林入都改秩。一日自外歸，逆旅主人云：「有二客訪君不過，留刺而去。」視之，蓋高續古、鍾春伯二館職也，皆素昧。明日往謝，高云：「吾於陸伯敬處見子某詩。」鍾云：「吾於南塘處見子四六，相約訪君，共論此事，何相避之深也！」鍾惠四六一卷，高遺《疎寮詩》二冊。未幾，鍾顯貴，高出館不復入，今皆物故。

（嘉定癸未年（1223年）から嘉定甲申年（1224年）までの間に、私は桂林から都へ改秩する途上であった。ある日、外出から宿に戻ると、宿の主人が「2人のお客さんがお伺いになりましたが、ちょうどお留守だったので、名刺を残して立ち去られました」と申し上げた。名刺を見ると、高似孫（字は続古）と鍾震（字は春伯）の2人の館職であり、これまでに会うことのなかった方々であった。翌日、彼らの住所を訪れ、挨拶に行った。高似孫は「陸伯敬よりあなた様の詩を拝見している」と述べ、鍾震は「趙汝談よりあなたの四六詩を拝見しており、高似孫と共にあなたを訪ね、詩文を論述する約束をしていたが、なぜ私たちを避けるのか」と指摘した。鍾震は私に四六詩一卷を贈り、高似孫は『疎寮詩』二冊を私に贈った。間もなく鍾震は昇進し、高似孫は館職を離れた後、朝廷に入ることがなくなり、今ではそれまでの境遇とは異なる状況となっている。）

とあり、高似孫も『南岳稿』の名声で劉克莊に会いに来たのではないかと推測している。しかし、同巻167「龍學竹隱傅公」行狀に、

高似孫嘗獻侂冑九詩，皆有錫字，公論其有無君之心。

（高似孫は以前、韓侂冑に9首の詩を献上しており、各詩には「錫」という字が含まれており、世間一般は彼の心に皇帝が存在しないと議論している。）

と、残念なことに、劉克莊は高似孫の素行に対する評価が高くない。後続の劉克莊とは交わりがなかった。

そして、以下4人の江湖派詩人には特に明確に劉克莊との接触の痕跡はなかったが、南

岳稿への評判がある。

『江湖後集』巻3、周端臣「代上劉郎中」に、

彈壓江湖聳市朝，相逢人盡說風騷。詩從南嶽吟逾老，名得西山（真德秀）薦益高。半世歷官纔幕府，午年還國尚郎曹。兒時曾誦先生句，鏡裏如今已二毛。

（江湖に隠棲しながら朝市に出入りし、出会った人々と詩文について議論を交わす。私（周端臣）の詩文は長年にわたり『南岳稿』を参考にし、執筆を続けてきた。劉克莊は真德秀（号は西山）の推薦を受け、詩名をますます高めることができた。50代半ばを過ぎてから胡楓の桂林幕府でしか任官することができなかった。嘉定壬午年（1222年）に都に入って改秩し、初めて郎官に就任することができた。私は子供の頃先生（劉克莊）の詩を読んだ経験があるが、今では鏡の中の自分は、すでに数本の髪しかない。）

とある。また、許棐『梅屋集』の「讀南岳新稿」に、

細把劉郎詩讀後，鶯花雖好不須看。

（劉克莊の詩文をよく読んでみると、鶯の花はいいが鑑賞する必要はないと感じた。）

とある。『江湖小集』巻94、武衍『藏拙餘藁』の「劉後村被召」に、

細評南嶽藁，遠過後山詩。

（『南岳稿』をよく鑑賞すると、陳師道（号は後山居士）の詩よりも優れると感じる。）

とある。江湖小集』巻46、朱南傑『学吟』の「夜坐書懷」に、

挑燈看徹後村詩，忽爾憧憧百所思。

（点灯しながら夜を徹して劉克莊（号は後村）の詩集を見て、突然頭の中で多くの啓発があった。）

と、以上の史料から、高似孫と周端臣が入手した『南岳稿』は最初に刊行されたバージョンで、趙汝談や真德秀の推薦を経て『南岳稿』を読んだのかもしれないと推測される。また、許棐の「新稿」という言葉によって、復刻版の『南岳稿』を手に入れたことは明らかである。さらに陳起との関係を考察すると、陳起から『南岳稿』を手に入れた可能性が高いと推測される。以上の評価と後述する鄒登龍の評価を加えて、劉克莊の『南岳稿』の影響力の大きさがわかるが、後の宝慶年間（1225—1227）の江湖詩禍の伏線ともなっている。

もう一つ興味深い点がある。張宏生（1990）が江湖派詩人に関する研究を行った結果、前述の4人の江湖派詩人のうち、3人は両浙西路出身である。残る周端臣は両浙西路出身ではないが、彼は両浙西路の臨安に居住する。これにより、刊行された『南岳稿』の臨安での影響力を推測することができる。また、劉克莊と交遊する江湖派詩人の出身地を考察することで、両浙西路出身の詩人の数が少なく見えるが、これは劉克莊が両浙西路において影響力が弱いことを示しているわけではない。逆に、陳起が『南岳稿』を刊行した後、

劉克莊の影響力は両浙西路の臨安において徐々に拡大していると言える。

### （３）晩年期に福清林氏との交遊関係

平田茂樹（2022）では、莆田県の劉氏は方氏、林氏、鄭氏、陳氏などとの間で結婚して結合したと考えている。劉克莊の妻林節も林氏であるが、莆田林氏一族ではなく、福清林氏一族である<sup>112</sup>。小林義広（2001）の研究によれば、莆田城北側の鳥石山が多数の莆田士大夫の集中地であることがわかる。莆田県士大夫間の対外交流は、主に南側の泉州に集中しているのでなく、東北の境を接する福州であり、特に福清県が多い。劉克莊は晩年も二人の福清林氏一族の江湖詩人と密接に関係していた。

林希逸（1193—1271）、字は肅翁、号は虜齋と竹溪である。福建路福州福清県の人。劉克莊の郷賢網山先生林亦之の嫡孫である。劉克莊と同じく、林希逸は南宋理学大儒林光朝の弟子である<sup>113</sup>。劉克莊の行状や文集の序の著者でもあり、『後村先生大全集』の存続を促した大功労者でもある。劉克莊と交遊する江湖詩派の詩人の中で、史料が最も多く残されている詩人がおり、その数は数え切れないほどに多いと言える。同じく福清林氏の一族に属する林希逸と劉克莊の関係はすでに多くの研究者が研究したことがある<sup>114</sup>。

その中で丁丹（2010）の一文は最も詳細に考察した。林希逸は早年に劉克莊の詩文を読んだことがあるが、二人は端平三年（1236）に至ってから知り合いになった。劉克莊と林希逸の交際はお互いの官歴で途絶えたことはなく、晩年になってより密接に交流していた。交遊内容には、誕生日祝い、病氣見舞い、任官祝い、孫の出産祝いなどが含まれている。劉克莊は林希逸の妻への挽詩を書いており、長男との交遊もある。同時に二人の任官の経歴も似ている。しかも地域が近いため、共通の親友が多く（林公遇、洪天錫、劉震孫、方大琮、王邁、鄭清之など）、また共通の後輩（林同、林合）もいる。周炫（2014）は別な角度から注目する。二人は詩文の唱和を除いて、書画も得意だ。劉克莊は林希逸が所蔵していた書画碑帖に題跋を書くことがある。全部で13編ある。また、『後村先生大全集』巻92「福清縣重建譙樓」に、

侯請竹溪中書林公希逸篆縣扁，而屬予記之。

（福清県の長官は中書舎人である林希逸（号は竹溪）に福清県の扁額を書き下ろすように依頼し、その記録を残すために「記」を著すよう私に要請された。）

<sup>112</sup> 王莉「対南宋福清林氏家族的幾点認識」（『中国社会經濟史研究』1996年第1期）を参照。

<sup>113</sup> 周炫「劉克莊与艾軒、湘鄉學術淵源探究」（『文史新義』2014年第4期）、李祥「艾軒学派と江湖派詩人の研究」（九州大学博士学位論文、2016年）などを参照。

<sup>114</sup> 向以鮮『超越江湖の詩人—後村研究』（巴蜀書、1995年）、丁丹「林希逸与江湖詩人的交遊考」（『文教資料』2010年第18期）

周炫「劉克莊与王邁、林希逸の文学交遊述考」（『湖南社会科学』2014年第4期）、王晚霞「南宋文人的文化生活—林希逸与文人雅士の交遊為中心」（『閩江学院学報』2016年第1期）、王晚霞「林希逸生卒年考弁」（『東南學術』2016年第1期）などを参照。

と、及び同巻 93「新筑石塘」に、

竹溪中書林公大書「石塘」二字，徑四尺，刻隄上。

（中書舎人である林希逸（号は竹溪）は「石塘」と称する二つの大きな文字を書き、直径が四尺に達するその文字を、堤に刻んだ。）

とある。上記には林希逸が題字して、劉克莊が記を書いたという記述が見られる。福清一帯では、二人に書道と文章を依頼することは少なくなかったことがわかる。

林同（？－1276）、字は子真である。父は劉克莊の妻林節の兄林公遇である。弟は林合（字は子常）である。福建路福州福清県の人。

林同と林合も劉克莊と交遊しているが、林同だけが江湖派詩人に組み込まれており、筆者を困惑させた。林同が現在残しているごくわずかな史料の中から、劉克莊が唱和した時、劉克莊はすべて「二林」と呼ばれていた。例えば、『後村先生大全集』巻 17「梅花十絶，答石塘二林」、同巻 18「用石塘二林韵」、同巻 32「子真子常餉双鸳將以五言効顰三首以謝<sup>115</sup>」、同巻 98「二林詩後」がある。また、同巻 93「林寒齋烝嘗田」に、

寒齋既没，二子同、合自列於府言：寒齋所受先世産錢一貫九百二十一文二分五釐、苗米二十三石三斗三升三勺，某兄弟以分産異居爲恥，願以薄産盡撥充寒齋烝嘗，永不分析。

（林公遇（号は寒齋）が亡くなった後、彼の二人の息子である林同と林合は共に官庁を訪れ、「父が受け継いだ祖先の財産は、合計で 921 文 2 分 5 厘、苗米 23 石 3 斗 3 升 3 勺であった。私たち兄弟は財産と土地を分割する恥を避け、これらの些細な財産をすべて林公遇の祭祀に充て、永遠に分けないことを望んでいる」と述べた。）

と、同巻 92「惟友庵」に、

如石塘林氏者鮮矣。寒翁既没，子常事兄如父，家政聽焉。子真亦極友愛，連牀之語至曙，一膳之珍必剖，蓋二子不出戶庭，而一鄉之人化焉。

（福清県石塘の林氏のような人々は少々である。林公遇が亡くなった後、林合（字は子常）は兄である林同に対して父のように接し方をしており、家事などの決定は林同の意見に従った。また、林同（字は子真）も兄弟に対して非常に友愛な態度を示し、夜明けまで兄弟と語り合うことが多く、食事は常に兄弟に分け与えていた。もともと兄弟二人は家から出なくて無職であったため、郷の人々（福清県石塘村の住民）が彼らに食事を援助した。）

とある。林氏兄弟は江湖詩派の中での最も親密な関係である。上記の劉氏兄弟と胡氏兄弟の間の関係とは少し異なる。

---

<sup>115</sup> ここは「林同（字は子真）と林合（字は子常）は私に二羽のオシドリを贈与された。私として、その感謝の意を現すために、五言詩を三首、模倣して贈答の詩を送り届けた。」と訳す。

また、『後村先生大全集』巻 91「孝友堂」と巻 92「惟孝庵」、「惟友庵」には林氏兄弟の居住地について詳細に記述されている。劉克莊は林氏一族の居住地についてよく知っていることがわかり、福建路出身の江湖派詩人と劉克莊の交遊に、劉克莊は彼らの住所に多かれ少なかれ言及した。お互いの居住地がよく行き来できる距離なのではないかと推測している。

また、上述の通り、「子真子常餉双鴛將以五言効顰三首以謝」という文章から、彼らの間にはまだ贈り物を贈り合う関係があることが分かる。劉克莊と江湖派詩人との関係を考察すると、贈り物を贈り合う事例はほとんど見られなかった。

林氏兄弟と劉克莊の交遊で最も重要なのは梅花百首の唱和活動だ。辛更儒の校注によって、この梅花百首は淳祐六年（1246）冬から書かれ、淳祐十年（1250）十二月に完成した<sup>116</sup>。これは福建路全域に影響を与える活動であり、後続の唱和者が多い。『後村先生大全集』巻 98「二林詩後」に、

余於二十年前見子常詩，警句的對大率如唐大家數之作，余有咄咄逼人之歎。

（私は二十年前、林合の感動的な詩句を拝見し、唐代の大詩人の詩に匹敵するような彼の才能が、人々にプレッシャーを与えるほどであると感嘆した。）

とある。その編年を考えると、1262 年から 1268 年の間に書いており<sup>117</sup>、彼らの交遊は 20 年以上経っていることがわかる。時間は梅花百詠の書く時間とほぼ重なる。林氏兄弟と劉克莊がこの時から交流を始めたことも明らかになった。この唱和活動について、『愛日齋叢抄』巻三に、

李伯玉縝漢老参政之子，號萬如居士有梅花百詠，後莆田林子真同子常合賦梅十絕句，劉潛夫端明喜其有志，為和韻至十疊，或以伯玉詩呈劉公，公擬異日當效李體別課百首不果作，二林遂成百梅卷劉公題其後，（中略）一時騷人名士相踵用韻。（中略）李氏之後，莆田唱酬為盛。

（李縝（字は伯玉）は参政李邴（字は漢老）の息子であり、万如居士と号し、梅花百詠（梅を詠んだ百首の詩群）を有する。その後、莆田の林同（字は子真）と林合（字は子常）は共に梅花をテーマに絶句 10 首を詠んだ。端明殿学士劉克莊（字は潜夫）は彼らが志を有することに喜びを示し、彼らの詩の韻に合わせて 10 組の詩（100 首）を書き上げた。李縝の詩を劉克莊に献上する者がいたが、劉克莊は李縝の詩を模倣して別の百首の詩を作ろうとしたが、結局、実験しなかった。林氏兄弟二人は百首の梅花の詩巻を書き上げ、劉克莊はその題跋を記して後に添えた。（中略）当時の江湖詩人及び有名な詩人は次々と梅花百詠の韻を用いて詩を書き上げた。（中略）李縝の梅花百詠という活動の後、莆田の梅花百詠の活動が最も盛大であった。）

<sup>116</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』（中華書局、2011 年）965 頁を参照。

<sup>117</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』（中華書局、2011 年）4111 頁を参照。

とある。また、『後村先生大全集』巻17「梅花十絶答石塘二林」十疊の後に、

石塘二林、寒齋子也。長名同、次名合、各以梅絶句示余。喜其後生有志、爲作百首。

（福清県石塘に住む林氏兄弟は、林公遇の息子である。長男は林同、次男は林合と名乗る。彼らはそれぞれ梅花を題材にした絶句を書いてくださった。私は志を抱く後輩を愛する者であり、梅花をテーマにした百首の詩を作った。）

と説明した。この唱和活動は林氏兄弟が先に提案したことがわかる。目的は明確ではないが、劉克莊は後輩を教育する意味で返事をしたのかもしれない。程章燦<sup>118</sup>と孫培（2023）ではいずれもその参加者を考察しているが、残念ながら他の江湖派詩人の姿は見られない。上述の胡仲弓だけが今回の活動を評価したことがある。劉克莊を除けば、唱和詩も方蒙仲のものだけが残っている。劉克莊本人の梅花百詠でも、四疊から八疊が欠けており、63首の詩しか残っていない。江湖詩禍の余波が続いていたのであろう。

上記の劉克莊と福清林氏の間関係を考えると、林希逸との知り合いには学縁関係がある。林同と林合との交わりには姻縁関係がある。劉克莊の妻林節の兄林公遇を通じて二人の子供と知り合いになった。その中で林希逸はまた林公遇と交遊関係にある。林氏兄弟はまた林希逸と劉克莊の共通の後輩である。四人組の唱和の記録はないが、福清林氏と劉克莊の小さい交遊圏が形成されているのではないかと推測している。

劉克莊と江湖派詩人との関係について述べるにあたって、劉克莊の晩年における福清林氏との数人の関係が非常に親密であった。また、劉克莊は他の江湖派詩人の後輩との間にもつながりを持っていた。以下に述べる通り、劉克莊が晩年に他の江湖派詩人の後輩との交遊パターンを垣間見ることができる。

#### （4）考察しにくい交遊関係

『後村先生大全集』巻96「送謝昨」に、

余少嗜章句，格卑調下，故不能高。既老，遂廢不爲。然江湖社友猶以疇昔虛名相推讓，雖屏居田里，載贄而來者常堆案盈几，不能遍閱。

（私は少年時代、詩文を書くことを大好であったが、詩風が卑下していたため、有名になることは叶わなかった。そして年をとってから詩文の課題が荒廃しつつあるにもかかわらず、江湖の社友の皆様は、私の昔の虚名を理由に私を推薦してくださった。私は田舎に住んでいるが、多くの人々が手紙を多数持って私を訪ねてくる。これらの詩集は常に机で溢れかえり、私は全てを読むことができない。）

とある。劉克莊は晩年、自分の詩名や官職地位の影響力で、多くの江湖詩人が詩稿を送ったり、跋文を書いてほしいと頼んだりしていたことがわかる。以下の江湖派詩人はいずれ

---

<sup>118</sup> 程章燦『劉克莊年譜』（貴州人民出版社、1993年）244—245頁を参照。

もその生涯について考察するのが難しい。劉克莊との交遊関係があるが、交遊頻度は不明な詩人である。

#### a 「故人」関係

黄簡、あるいは居簡と呼ぶ。字は元易と符易、号は東浦である、福建路建寧府建安県の人。『後村先生大全集』巻 149「黄柳州」墓誌銘に、

朝請大夫黄公諱簡字德廉將葬，孤浚明奉《家傳》來乞銘。余矍然曰：「公吾故人也，銘其可辭？」黄氏自固始遷閩，至八世祖校理公興自泉遷莆。

（朝請大夫黄簡、字は德廉である。埋葬の準備をしていた時、彼の子供の浚明は先祖の事跡を記した伝記をもって、父の墓誌銘を請求してくれた。私は（手紙を見て）非常に驚いた。「(黄簡)は私の昔の友人です。墓誌銘を書くのは私には辞退できません」と言った。黄氏一族は黄固から福建に移り、八世祖校理公黄興の時代に、泉州から莆田に移った。）

とある。残された史料はこれしかないが、劉克莊は「故人」と呼び、交流したことがあったと推測している。

#### b 後輩への指導

①程垣、字は実務、号は逸士である。福建路龍岩人。『後村先生大全集』巻 100「程垣詩卷」があり、題跋の内容は後輩への教育のようだが、程垣の詩風が奇妙だと評価する。また、同巻 109「跋梅窗程公坦詩卷」に、

郊以寒，島以瘦，盧仝、劉義以怪，皆名家。然止求昌黎公印可，不徧求名公卿也，君其思之。

（孟郊、賈島は清らかで質素で孤高な詩風で有名で、盧仝と劉義はいずれも怪異な詩風で有名になる。彼らはすべて有名な詩人である。しかし、彼らは韓愈（世の中に昌黎と称する）の公印だけを求めて十分であり、高官や貴人だけを求めていないので、よく考えてみてください。）

とある。中には詩風の奇妙な問題にも触れ、後輩にアドバイスをしている。詩卷の主人「梅窓程公坦」は誰かが特定できないが、筆者はこの二つの文がつながっているかもしれないと推測している。

②宋慶之、字は元積と希仁である。兩浙東路瑞安府永嘉県の人。『後村先生大全集』巻 27「次韻別宋希仁」に、

此別未知重面日，可堪回首送軒車。

（今回の別れ後、次に会う日がまだ分からないのに、あなたを乗せた乗用車を振り返

らずに見送ることができるだろうか。)

とある。『兩宋名賢小集』巻 344、宋慶之『飲冰詩集』の「碧鷄艸堂呈劉後村」に、  
斯文海内聲名闊、猶是乾淳一脈餘。須信昌黎曾得謗、可憐太史未成書。碧雞有地吟詩老、金馬無心待詔初。甚欲見君三十載、春風今時侍巾車。

(あなた(劉克莊)の詩文は国内外で名声が高く、特に乾道から淳熙年間(1162～1189 年)の脈々と受け継がれている。韓愈(世の中に昌黎と称する)はかつて誹謗されたことが信じて、残念ながら司馬遷が書いた本はまだ完了していない。私(宋慶之)は碧鷄草堂に年を取るまでに詩を詠むことができる土地があって、入朝する壮志な初心はもういかなかった。私は 30 年以上あなたに会いたいと思っていたが、今は春風とともにあなたの車が来るのを待っている。)

とあり、二人は会ったことがあると推測している。また、『後村先生大全集』巻 97「宋希仁詩」と「宋希仁四六」で、劉克莊は宋慶之の文学に対する造詣が高く評価している。また、辛更儒の校注により、この二編は劉克莊の晩年 1257 年から 1262 年の間に書かれていたが、当時宋慶之はまだ科挙に合格していなかった<sup>119</sup>。二人は年齢を越えた親交をしていたと推測する。

③姚鏞(1191—?)、字は希声、号は雪篷である、兩浙東路処州剡溪の人。『後村先生大全集』巻 9「寄章貢姚別駕」と「寄章貢姚使君」がある。辛更儒の校注によれば、この二つの詩は紹定五年(1232)に書かれたものである<sup>120</sup>。張繼定(2018)<sup>121</sup>によれば、章貢は贛州であり、別駕は宋代の時は通判の別称である。使君は州府主官の通称である。この 2 つの詩はいずれも姚鏞が贛州寇患を平定したことを称賛する詩文である。また 1239 年から 1240 年にかけて書かれた『後村先生大全集』巻 99「姚鏞縣尉文稿」もある。その中には後輩を指導する意味がある。二人は 1232 年から 1240 年の間に交遊していたことがわかる。

#### c 判断しにくい関係

①周師成、字は宗聖、号は雉山である。兩浙西路湖州長興人。韋居安『梅痴詩話』巻下に、

鄉人周師成，字宗聖，號雄妙年摺第，博學工詩文，一時名宿如盧申之、趙紫芝、劉潛夫諸公皆與之遊。有家藏集。

(同郷の周師成、字は宗聖で、号は雉山である。若くして科挙に合格し、博学で詩文

<sup>119</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』(中華書局、2011 年) 4095 頁、箋注(一)を参照。

<sup>120</sup> 辛更儒 校注『劉克莊集箋注』(中華書局、2011 年) 505 頁を参照。

<sup>121</sup> 張繼定「南宋江湖派詩人姚鏞仕官考」(『紹興文理学院學報』2018 年第 5 期)

を書くのが得意だ。当時の有名な詩人、例えば盧祖皋（字は申之）、趙師秀（字は紫芝）、劉克莊（字は潜夫）などが彼と交遊した。周師成は『家藏集』を書いていた。）とあり、二人が交遊していることはわかるが、それ以外の交遊記録は見つからない。

②鄒登龍、字は震父である。江南西路臨江軍臨江県の人。張宏生（1995）により、『南宋六十家小集』姚鏞『梅屋吟』の「読鄒震父詩集」に「句法間從南嶽出<sup>122</sup>」とある。鄒登龍は劉克莊に学んだことがわかる。また、『江湖小集』巻 69、鄒登龍の「寄呈後村劉編修」に、

人競寶藏南嶽藁，商留金易後村編。儻令舐鼎隨雞犬，凡骨從今或可仙。

（誰もが争って『南岳稿』を所蔵し、商人たちは金を換えて劉後村の文集を買おうとした。もし私を権力者に取り付けることができれば、私の平凡な肉体は仙人になることができる（私の官途は順風満帆になる）。）

とある。前述の数人と同様に、鄒登龍も劉克莊の南岳稿を高く評価している。

#### 4. 結語

以上、本文は劉克莊を中心とする江湖詩派のネットワークについて考察した。考察の過程で、複数の詩人の間にも交遊関係があったことが分かった。江湖派詩人は、伝統的な文人士大夫のように安定した結社組織を構築することはめったにないが、相互の交遊は頻繁だがわかる。その中には遊走型詩人や、官歴のある詩人たちが少なくないからだ。江湖詩派のネットワークは複雑で重なり合う構造を形成している。江湖詩派内の詩人それぞれの経歴や出身地、地位の違いからも、さまざまな交遊の特徴が現れている。「移動」と「変化」は江湖詩派ネットワークの核心といえる。総じて、江湖詩派内部のネットワークは非常に複雑である。地域的に見ると、前述の孫培（2023）が言及したように見える。しかし、劉克莊を中心とする江湖詩派のネットワークを考察すると、時期によって交遊パターンが変化することが分かった。また、一般的な文学交流のほか、劉克莊と江湖派詩人との関係の親疎、及び身分により、交遊する際には独自のパターンがある。また、劉克莊がある江湖派詩人と関係を構築すると、詩人本人だけでなく、彼の妻、兄弟、子供、甥及び友人も劉克莊と交流することも多い。江湖詩派のネットワークは、従来の伝統的な文学詩社に比べて、範囲が広く、多重であり、複数の重点と中心が存在する。また、時間の経過に伴って変化したり消えたりする場合もある。その中には血縁、地縁、学縁関係も伴い、朝廷がこのグループに対して持つ態度も、グループの内部関係に影響を及ぼしている。

また、劉克莊を中心とする江湖詩派のネットワークには、劉克莊の人生が異なる段階で変化しているためでもある。考証しにくい交遊関係を除いて、筆者は劉克莊の交遊経歴を

---

<sup>122</sup> ここは「鄒登龍の書いた詩文は『南岳稿』の詩句を参考にすることができる」と訳す。

3つの部分に分けた。官僚になる前に江西撫州と臨安で国子監生になった時に構築したネットワーク、地方官時代に構築したネットワーク、そして晩年には福建福清林氏とのネットワークの3つがある。

官僚になる前の時期は、劉克莊が江湖派詩人たちと連絡を取っていた爆発期だった。福建路エリアでは、弟の劉克遜との交遊はもちろん、同じ莆田の趙庚夫とも早く知り合った。その後、劉克莊は父と一緒に江南西路撫州に行ったため、地元の宋氏一族の宋自遜、趙氏一族の趙汝錡、同じ社友の曾極に交わり、その中で宋氏一族との関係は非常に緊密だった。劉克莊が臨安で国子監生になった時期には、数人の江湖詩派の前期詩人と知り合った。その中には、江南西路の宋氏一族、もう一つは福建路の方信孺を中心とした交友関係、そして社友グループなどのいくつかの比較的重要なグループがある。この社友グループはどこで交流するのかよく分からないが、彼らと劉克莊の交遊から福建省莆田県での交遊が多いことがわかる。また、この社友グループの中には少なくとも3人の遊走型詩人がいて、戴復古、孫惟信、翁卷など、彼らのネットワークには江南西路の江湖派詩人たちとのつながりも少なくない。劉克莊のこの時期の交流が頻繁であるだけでなく、範囲が広いことがわかる。

二段目は初期ほど密接な関係ではない。そしてこの時期の交遊は江湖詩禍の影響を際立たせた。劉克莊と江湖詩派メンバーの交遊史を見ても、多くの関係は江湖詩禍が発生する前に交遊関係を結んでいた。特に胡仲弓、陳起と劉克莊の間の交遊が顕著で、人を巻き添えにするのを心配して、劉克莊は二人の返事に対して慎重な態度を取っている。しかし、その中で書坊の主人である陳起と劉克莊の交遊パターンは特別だ。江湖詩派の詩人たちが唱和したり、一緒に景勝地を遊覧したり、酒を飲んだりして楽しむ以外の交遊パターンを見た。それは文集の刊行と収集である。また、この期間に『南岳稿』の発行で劉克莊の名声が高くなり、多くの江湖派詩人の注目を集めた。明らかな交遊の跡がある高似孫を除いて、筆者は周端臣、許棐、武衍、そして朱南傑と劉克莊の関係を説明できていない。

晩年期、前述の江湖詩禍の影響はまだ残っている。福建路全体に影響を与えた梅花百首の唱和活動があっても、江湖派詩人の姿はめったに見られない。これは晩年の劉克莊が官職地位や詩名の向上に伴い、能動的または受動的に江湖詩派との関係を疎遠にした可能性も考えられる。しかし、福建福清の林氏一族との関係はこの三つの期間で最も緊密で、その中には婚姻関係や地縁の影響も含まれていた。林氏兄弟との珍しい品物の贈答行為や、林希逸との書画鑑賞交流もあった。そして劉克莊自身も晩年には多くの人から詩稿をもらえることに言及しており、最後の小節「考察しにくい関係」においても、後輩への指導する題跋が少なくないことがうかがえ、これらも劉克莊が晩年に書いたのではないかと推測している。

本文は劉克莊と交遊関係にある江湖派詩人を分類に試みた。複数の詩人が劉克莊と単に

繋がりがあのみならず、複数の身分で接触することを示した。例えば臨安の社友グループの中で、孫惟信と高翥はまた福建方信孺の交遊圈の中にある。曾極、敖陶孫、陳起と劉克莊はまた同じ江湖詩派の関係者であるが、彼ら三人が劉克莊と知り合った時期はそれぞれ異なっている。また、劉克莊と交遊関係にある詩人の中には、特別な宗室趙氏の詩人たちもいる。そのうち二人は劉克莊の社友グループに属している。つまり、江湖派詩人の身分は時間によって変化することがわかる。侯体健（2017）が述べたように、今後は動的な視点から江湖詩派を考察すべきである。

また、筆者がこの課題の研究を行った際にも、今後検討すべき課題がいくつも観察された。

孫培（2023）も江湖詩派のネットワークを考察する際、孫惟信を江湖詩派のメンバーに入れた。筆者も林同の弟林合は、江湖詩派のメンバーには含まれていないのではないかと疑問を持っている。このような詩人は、ネットワークを考察する際に、彼らが見失われた江湖派詩人であるかどうかを考えることができる。従って、これまでの固定化された基準で江湖派詩人を特定するのではなく、時間と身分の変化から江湖詩派を考察することができるのではないだろうか。

本文は江湖詩派内部のネットワークに注目しているだけで、実際には江湖詩派と外部との関係についても同様に考察が不可欠である。例えば、鄭清之が江湖派詩人との関係において、特に林希逸と共に『文房四友除授集』を編纂し、出版したことがあった。江湖詩禍が発生した際には、鄭清之が中に斡旋してこそ、劉克莊と陳起が受ける罰を軽減することができ、劉克莊はその後朝廷に入って中央朝官となり、陳起も書商の商売を再開することが可能になった。非江湖詩派の詩人と江湖派詩人との関係についても検討する価値がある。このような交遊関係の検討は、江湖詩派というグループのイメージをより深く理解することができる。しかし、時間と精力の制限を考えると、筆者はこれ以上深く検討することはできない。

最後に、江湖詩派の行謁行為についても再検討する必要がある。本稿では、費君清（2005）が行謁行為に対する総括をおこなったこと、及び一部の研究者が宋自遜と戴復古の行謁行為に関する分析を行っていることを述べた。実際には、江湖派詩人の行謁行為が明・清代の学者が述べたように卑劣ではない可能性があることが明らかになった。行謁して金を求める行為はその唯一の目的ではないとされるため、今後の研究者は、明・清代の学者が持つ行謁という行為に対する偏見を超えて、その行為の合理性を再評価すべきである。最後に、本稿によって江湖詩派の定義と江湖派詩人の定義に啓発を与えられることを望む。

## 【参考文献】

### 1. 单行本（年代順）

- 程章燦『劉克莊年譜』（貴州人民出版社、1993 年）  
張宏生『江湖詩派研究』（中華書局、1995 年）  
向以鮮『超越江湖的詩人—後村研究』（巴蜀書社、1995 年）  
陳書良『南宋江湖詩派与儒商思潮』（甘肅文化出版社、2004 年）  
辛更儒 校注『劉克莊集箋注』（中華書局、2011 年）  
内山精也 編『南宋江湖の詩人たち—中国近世文学の夜明け』（勉誠出版、2015 年）  
孫培『南宋江湖詩派的群体性与地域性考察』（四川大学出版社、2023 年）

### 2. 論文（年代順）

- 葛兆光「趙師秀小考」（『文学遺產』1982 年第 1 期）  
胡益民「陳起交遊統考」（『文献』1989 年第 2 期）  
陳增傑「对「趙師秀小考」的幾点補正」（『文学遺產』1984 年第 3 期）  
張宏生「〈江湖集〉編者陳起交遊考」（『文献』1989 年第 4 期）  
張宏生「江湖詩派成員考」（『古典文献研究』1990 年第 2 輯）  
胡益民、周月亮「江湖集編者陳起交遊統考」（『文献』1991 年第 1 期）  
胡益民「趙師秀交遊考」（『文献』1991 年第 2 期）  
張宏生「江湖詩禍考」（『文学研究』1992 年第 1 輯）  
王莉「对南宋福清林氏家族的幾点認識」（『中国社会經濟史研究』1996 年第 1 期）  
陳曉蘭「翁卷生平及其詩集考述」（『北京大学古文献研究所叢刊』1999 年第 1 期）  
小林義広「南宋期における福建中部の地域社会と士人—劉克莊の日常の活動と行動範囲を中心に」（『東海史学』2001 年第 36 卷）  
張繼定「戴復古生卒年考弁」（『文献』2003 年第 1 期）  
池太寧「戴復古的生平与創作」（『台州学院学报』2003 年第 2 期）  
費君清「南宋江湖詩人的謀生方式」（『文学遺產』2005 年第 6 期）  
常德榮「南宋詩人敖陶孫考論」（『陰山学刊』2010 年第 6 期）  
陳增傑「趙師秀考論三題」（『浙江社会科学』2010 年第 10 期）  
侯体健「劉克莊の鄉紳身分与其文学総体風貌的形成——兼及「江湖詩派」的再認識」（『中山大学学报』2011 年第 3 期）  
陳增傑「永嘉四靈考論四題」（『温州大学学报（社会科学版）』2011 年第 3 期）  
周炫、陳建森「從師友交遊看劉克莊的文学及仕途」（『學術研究』2011 年第 9 期）  
内山精也「宋詩能否表現近世」（周裕鍇 編『第六屆宋代文学国际研討文集』（巴蜀書社 2011 年）

楊理論、駱曉倩「略論江湖詩派中的宗室詩人」(『重慶師範大學學報(哲學社會科學版)』2012年第5期)

羅紅娟「江湖詩人周文璞生平研究」(『文教資料』2013年第36期)

周炫「劉克莊與王邁、林希逸的文學交遊述考」(『湖南社會科學』2014年第4期)

陳宇「論『詩家鼎鑪』與戴復古及江湖詩派之關係」(『中國韻文學刊』2015年第2期)

侯體健「南宋祠祿官制與地域詩人群體：以福建為中心的考察」(『復旦學報(社會科學版)』2015年第3期)

王晚霞「南宋文人的文化生活——林希逸與文人雅士的交遊為中心」(『閩江學院學報』2016年第1期)

王晚霞「林希逸生卒年考弁」(『東南學術』2016年第1期)

侯體健「『江湖詩派』概念的梳理與南宋中後期詩壇圖景」(『文學遺產』2017年第3期)

張繼定「石屏詩編選者及序跋作者考述(下)——戴復古交遊考之二」(『浙江師範大學學報(社會科學版)』2017年第5期)

張繼定「戴復古籍貫問題再考弁」(『江蘇師範大學學報』2017年第6期)

吳茂雲「南宋詩人戴復古研究綜述」(『台州學院學報』2018年第1期)

呂肖奧「『江湖吟社』與南宋後期江西詩壇」(『江西社會科學』2018年第2期)

張繼定「南宋江湖派詩人姚鑰仕官考」(『紹興文理學院學報』2018年第5期)

熊海英「晚宋江湖詩人宋自遜的家世生平與交遊創作考論——兼及對南宋『江湖詩人』和『江湖體』的再認識」(『湖北大學學報(哲學社會科學版)』2020年第1期)

平田茂樹 著、胡勁茵 譯「南宋士大夫劉克莊的交遊空間與社會網絡」(『大阪公立大學東洋史論叢』2022年第22號)